

Lib.

京都産業大学図書館報

v:33, 増刊号 (Dec.13, 2006)

発表!!

第2回京都産業大学図書館 書評大賞

入賞者一覧

2

全体講評

3

入賞作品ならびに講評

<大賞>

4—5

<優秀賞>

6—15

<佳作>

16—35

アンケート・統計・概要

36—40

第2回京都産業大学図書館書評大賞

第2回京都産業大学図書館書評大賞には153篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次の通り入賞者が決定しましたので発表します。

大 賞	
氏 名 (学部学科 年次)	書 評 対 象 図 書
うちやま ちかこ 内山 千夏子 (経営学部経営学科 3年次生)	『芸術起業論』

優 秀 賞	
わたびき ちあき 綿引 千秋 (法学部法律学科 3年次生)	『青の炎』
おくで えり 奥出 江里 (経営学部経営学科 2年次生)	『パン屋再襲撃』
はしづめ ようすけ 橋爪 陽佑 (経営学部経営学科 3年次生)	『ヒロシマはどう記録されたか：NHKと中国新聞の原爆報道』
かわむら しょうた 川村 翔太 (経営学部経営学科 3年次生)	『コーポレート・レピュテーション』
やまじ ともち 山路 智子 (法学部法律学科 3年次生)	『旭山動物園のつくり方：「伝えるのは命」最北の動物園からのメッセージ』

佳 作	
うつぎ けん 宇津木 健 (経営学部経営学科 2年次生)	『ブータン自転車旅行：ヒマラヤの秘境六〇〇キロをマウンテンバイクで走る』
たむら あさみ 田村 朝美 (経営学部経営学科 2年次生)	『24人のビリー・ミリガン：ある多重人格者の記録』
みよし ゆりえ 三好 由里恵 (文化学部国際文化学科 2年次生)	『東京タワー：オカンとボクと、時々、オトン』
かわむら まさよし 川村 将慶 (経営学部経営学科 3年次生)	『マーケティングの「なぜだ!」がわかる本：知らないと絶対失敗する!25の鉄則』
あきた まどか 秋田 まどか (経営学部経営学科 4年次生)	『辞令』
まるお まゆみ 丸尾 麻由美 (経営学部経営学科 3年次生)	『走れ、俺たちのF1：ホンダF1戦う15人』
よこお けいすけ 横尾 圭介 (経営学部経営学科 2年次生)	『図解よくわかるCSR：企業の社会的責任』
おぐら まさひろ 小倉 匡弘 (経営学部経営学科 2年次生)	『ブランド構築と広告戦略』
いいじま あやこ 飯嶋 彩子 (経営学部経営学科 4年次生)	『iモード事件』
せじま まさひろ 瀬島 正大 (理学部数学科 2年次生)	『科学の最前線で研究者は何を見ているのか』

全体講評

図書館長 こばやし かずひこ 小林 一彦

書物を介し、時代と空間を超えて、作者と向き合う体験は、読書の醍醐味の一つです。「ひとりともしびのもとにふみをひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる」(徒然草・第十三段)と兼好法師も言っています。書評という知的な行為は、そのような体験をきっかけに、はじまるのではないのでしょうか。

京都産業大学図書館書評大賞は、今年、第2回目を迎えました。産声をあげたばかりの、歴史の浅い催しですが、昨年(125篇)を上回る、153篇の応募がありました。『野ブタ。をプロデュース』の作者、白岩玄氏の講演会や、ホームページ、チラシなどの広報活動も奏功したようです。また、書評大賞をよい教育の機会と捉え、ゼミ単位で応募を勧めて下さった先生がたの応援も効きました。しかし何よりも、この数字は、応募してやろう、という意欲的な学生が増えてきたればこそ、ではないのでしょうか。2年目にして、学内に認知され、定着してきた感があることは、主催者として嬉しいかぎりです。

応募作品の選考は、本人に関わる情報のすべてを伏せ、最後まで受付番号のみで行われます。まず、本学図書館の蔵書以外の図書を対象としたり、文字数の条件を満たしていない26篇が除かれ、残った127篇が本選考へと進みました。1次選考は、図書館委員の教員4名と図書館職員4名から各1名ずつ、少なくとも2名以上が、合議せずに別々に目を通し、評価が分かれた作品については、第3の委員が再度評価を行う、というものでした。その結果、第2次選考へと進んだのは57篇。今度は委員8名が全作品を精読し、採点基準を申し合わせた上で評価を点数化します。合計点を高得点順に並べた一覧表をもとに、選考委員会では、上位16作品が入選にふさわしいかどうか、またこれ以外にも見落としや漏れがないか、慎重に討議が繰り返されました。このような厳正な選考を経て、大賞以下の受賞作品が決定されたのです。

受賞作品には、共通した特徴が見られます。文章に力があるのです。図書を、作者と対等な目線で評価しようとする意欲のほとばしりが、感じられるといってもよいでしょう。この本はどこが面白いのか、的確にとらえる眼力も、選外の作品に比べてまさっていました。その本を読んでいない人にも、内容が伝わってくるように、書き方に工夫も見られます。特に上位に名を連ねた作品には、その傾向が強いといえるでしょう。ぜひ、次回以降に応募される人は、選考委員に「この本を読みたい」と思わせるような、書評を書いて欲しいと思います。

2年目を迎えた書評大賞ですが、残念な問題も浮かび上がってきました。すでに公表されている書評や解説を、剽窃・盗用した作品が、複数、見つかったことです。他人の意見を引く場合、引用部分と自分の意見とを、はっきり区別して示さなければなりません。最低限のマナーで、執筆者の良心が問われるところです。

書評の対象図書は多種多様でしたが、ビジネスの専門書や実用書が目立ちました。選考委員会でも、学生として大学時代に読んでおくべき名著に、もっと挑戦して欲しい、という意見が聞かれました。ニュートンもアインシュタインも、そして湯川秀樹も、すぐれた自然科学者であると同時に、哲学者でもありました。文系理系を問わず、哲学や宗教の古典にも目を向けて欲しいと思います。

末筆になりましたが、書評大賞を率先して企画立案し、ここまで育ててこられた佐々木前館長。そして今回、長期間にわたり通常業務のかたわら根気強く選考に従事してくださいました、図書館委員の池田先生(文化)・小田先生(経済)・竹内先生(理)・高島先生(法務研究科)・天笠・近江・中上・真部の図書館職員の皆さん。協賛いただいた丸善株式会社・株式会社紀伊國屋書店・株式会社キャリアパワーの各位に、衷心より御礼申し上げます。



書名：『芸術起業論』

著者：村上隆

出版社・出版年：幻冬舎，2006

「 芸術家清貧論を打ち破れ～オタク芸術家・村上隆の戦い 」

本書は日本の美術界に対する批判の書である。

筆者の村上隆氏は東京藝術大学にて日本で初めての日本画の博士号を取得後、渡米。日本のアニメやフィギュアなど、サブカルチャーをベースにしたポップな作品を発表。美少女フィギュア「Miss k o 2」には日本円で 6810 万円の高値がつくなど、今、世界でもっとも高値で取引される日本人現代美術家である。たかがフィギュアになぜ 1 億の高値がつくのか？

まず、「美術作品とは投資対象である」からである。アートを中心である欧米で美術作品を買うのは金持ち達であり、美術作品を持つことで社会的地位を高め、自分が目をつけた芸術家が育つ様子を見たい、という願望を持っている。だから彼らのわがままを知ること、彼らの望みにこたえることが必要だという。

次に、彼らは「作品そのもの」に投資しているのではなく、その作品の「ゲーム」や「しかけ」に注目し、作家の「観念」や「概念」に面白さを見出して投資する。作品が技術的に高いレベルかどうかだけでなく、どんなストーリーを持ち合わせているか、というような「枝葉」も重視する。その例として筆者は、ゴッホをあげる。ゴッホよりも才能のある画家は他にいてもかかわらず評価されたのは、耳を切り落とすといった「端的に説明できる物語」があったからではないか、というのである。要は作品とは「作れば終わり」なのではなく、そこからどのようなストーリーを展開できるか、もっといいうなら作品を通じて社会とコミュニケーションを取れるかといったことが求められるわけである。だからこそ筆者は、海外で個展を開く際、優秀なキュレーターを雇うことはもちろんのこと、紹介文を書く翻訳家選びなど、「いかに紹介するか」にも力を注ぐ。作品以上の価値がつくように緻密に計画されているわけである。彼は天才的なひらめきで美術家としての地位を築いたわけではなく、観察し、研究を行い、うまくプレゼンテーションしたことで上り詰めた努力型の美術家であると言えよう。

翻って、日本の美術界はどうか。大学では美術で生計を立てる方法を教えてくれることはない。その原因を筆者は「勤め人の美術大学教授が、生活に困らない学生にものを教える構造からは、モラトリアム的な自由しか生まれぬ」と主張する。彼らは大学機構に守られており、ぎりぎりのビジネスの現場で勝負をしたことなどない。そんな勤め人の美術大学教授が日本の美術界を牛耳っているのだから、「芸術とはビジネスである」など、到底言えないのだと。そうしたことを教えず、大学では「自分の好きなように作れ」と教えられる。美術界のルールも歴史も知ることなく、自分勝手に作品を作っていく。外に出れば厳しいルールが存在し、共同作業の中で作品をつくっていかねばならないというのに、それを知らないから、いつまでも自分たちの世界で閉じこもり、社会と関わることもなく、金銭的価値を見ることもない。これは美術大学のみならず、すべての学校現場においても

同様のことであろう。

筆者に対する批判は多い。筆者はアニメのような日本のサブカルチャー、いわゆる「オタク文化」を欧米の美術界に紹介した第一人者であるが、あくまで紹介しただけであり、オリジナルではないという批判がある。また、アートをビジネスとして捉える姿勢に対して「芸術家のくせに金にうるさい」と非難されたりする。しかし、芸術大学の短大部で演劇を専攻し、京都産業大学に編入した私は、「芸術は金銭と無縁」という実例をいくつも見て、そのたびに憤りを感じていた。例えば私の芸術大学時代の先輩は、関西ではそれなりに名の知れた小劇場の劇団女優でありながら、座長以外サラリーを貰っていない。筆者の言うように、芸術は金がかかる。制作費が高いことはもちろんだが、芸術大学は一般の文系大学よりも高い。理系学部と同じくらいと考えてもよい。それにもかかわらず、投資した分を回収する見込みが見えないとなれば、どうしてわざわざ芸術大学に行くという自己投資をするのだろうか。アートをビジネスとして確立させることは、結局のところ、大学の存命にも関わってくることと言えるかもしれない。筆者を批判している「勤め人の美術家」たちも、このことについて真剣に考える時期に来ている。もし芸術の道を目指されている方がいたら、ぜひ読んでみて欲しい。以前、宮台真司氏が「芸術家志望というのは現実から逃げている」と言っていたが、芸術の世界に行くことをモラトリアム呼ばわりされている現実がよいはずはない。「芸術家であるから」自分の世界で生きられると思ったら大間違い。結局、どんな職業であっても、人や社会とどう関わるか、そこを避けて通ることは出来ないのだ。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 池田 哲郎

書評の採点基準は、原著を手にした動機とその内容、うけた衝撃度、心理展開、書評だけで読めるか、原著を読む気にさせるか、などである。もちろん、他書評の無断引用は厳禁であるし、常套文句ではなく心で書いてもらいたい。今回の大賞に選ばれた書評は趣旨も一貫し爽快でさえある。原著にみえる「芸術家よ、すべからく起業家たれ！」といった類のスローガンも書評者には伝わっている。

しかし、原著は書評者が感じ取った以上に、日本の社会と文化を村上隆＝オタク流に告発した書かもしれない。黒澤明の晩年の失敗が模倣されやすい表層的な技術に焦点をしぼったためという説明もうまい。原著はオタク的なアートとしてのグラフィックだけで十分に評価できるが、漫画業界にはげしい「化学反応」がおこっているという意見に注目したい。絵巻や浮世絵や絵草紙のお国柄である。であるから、今や書店での売り上げの過半数は漫画である。嘆くことはない。学生諸君の中にも「最近の漫画はアートと文学の融合」だとする意見もある。漫画が依拠しているものが日本の文化であり文学であり社会であり人であるからである。そして、この潮流はインターネットの普及とあいまって、国際化している。そして、原著は日本全体の知に対して国際化への問いかけをしているわけである。

書評者のいう「どんな職業であっても、人や社会とどう関わるか、そこを避けて通ることは出来ない」は正論である。「そこ」とは「金(かね)」である。が、原著では巧妙にも「『金さえあれば』が言いわけならダメだ」とある。「怒り」という表現も原著にあったが、これは受身的にみれば「あせり」「焦燥感」でもある。もっと読み込みたいところである。攻撃的であるが故に熱狂的に歓迎されている村上隆本をマーフィー本だとして、未来日記をつけ、まさに記載内容通りの願望が実現できたとしよう。他の人を誘うべきか。最近、学生時代から起業していた20歳代の方に会うたびに「すべからく起業家でなければならぬのだろうか」と問うことがある。自分たちはたまたま成功しただけで、お勧めはしない、こういう返事が返ってくる。

人の生き方にこれというものはない。なにはともあれ、書評には青春の心意気を感じる。紅葉が赤く燃えるやさしき神山を眺めつつ思う：「君、いまだ初心忘れず」と。

受賞者から一言



恥ずかしながら、受賞についてまったく知らず、宝塚にいたとき友人からメールを貰って、初めて知りました。芸術大学から経営学部に編入し、自身の経験を経営学部でどのように生かしていくかを模索していたときに、この本を知りました。このように評価していただけたことをうれしく思っています。ありがとうございました。



書名：『青の炎』

著者：貴志祐介

出版社・出版年：角川書店，2002

「こんなにもせつない殺人者がかつていたのだろうか。」これは、本書の出版社側の謳い文句である。物語の内容は至って単純明快であり、この一文に集約されている。本書は完全犯罪を試みる少年の孤独な戦いを倒叙推理小説という形を用いて、懇切丁寧に描き上げられた物語である。

倒叙推理小説とは、前半、完全犯罪を計画する犯人の視点から描き、その後計画を実行、成功かに見えるが、警察や探偵によって事件が暴かれるという形式で書かれた小説のことである。つまり、この形式で書くことにより犯行の動機、犯人の心の内を全編通して、十二分に描くことが出来るのである。特に本書は、この形式が功を奏し、共感を持たれる主人公を描くことに成功している。何故なら、本書の主人公である秀一の動機は利己的な欲望ではないからだ。暗く重い、出世やお金や恨み等の欲望は彼の中にはない。秀一の心の中は無垢に近い。彼の願いはただ一つ。家族全員平和に、幸せに暮らすことだ。完全犯罪は愛する母親や妹を義父から守る為の最後の切り札だった。愛する人を守る為の殺人、愛する人を守る為に完全犯罪をやり遂げねばならないと秀一は考える。それが、彼の考え抜いた家族を守る最善策だった。

しかし、犯罪行為はどんな動機をもってしても肯定など出来ない。それでも、悩み、決断を下すまでの怒りと葛藤、家族や友達に対する愛、まっすぐな彼の内面の描写が細やかで巧く、特に彼の愛するものを守るという揺るぎ無い思いには、強く訴えかけるものがある。さらに、若さゆえの衝動が物悲しさを増す。衝動といえども、俗に言う「キレル」とはまた違う。何かに突き動かされるような、それでいてやり遂げなければならないという、決意に満ちた冷静な衝動である。彼の怒りの炎は「赤」ではなく「青」なのである。「赤い炎」が「青の炎」へと変わりただの想像、妄想が計画へと変わって行く。秀一に青い炎が灯る場面の描写が巧い。独りで静かに青い炎を灯す、孤独な背中が目に浮かぶようだ。読者は、主人公の決して明るくない未来を予想し、不安を抱く。しかし、目を背けることは出来ず、ページを読み進めずにはいられない。知らぬ間に、物語の中へ引きずり込まれ、あっという間に結末まで読み終えてしまう。

小道具も魅力の一つである。物語の中には科学や国語、英語のイディオム等が効果的に使われている。細かい所にまで工夫が凝らされているのだ。これらの小道具を使い、秀一的心情を表現することで、読みやすく、彼の心情が際立っている。また、高校生らしさと日常感を醸し出す。巧妙な完全犯罪の計画は勿論のこと、実行の全貌、それが破綻して行く過程や刑事とのやり取り、友情や恋の行方等等など楽しめる部分は盛りだくさんである。細部まで楽しめる小説である。そして、完璧だったはずの殺害トリックも徐々に暴かれて行く。そもそも、殺す意味があったのかと一瞬、主人公自身気持ちが揺らぐほどの追い討ちをかけるような新事実の発覚。破滅へと向かって行く終盤。愛する家族の為に彼が選んだ最後の決断とは……物語の終わりは、救いようがないほど切なく悲しい。

自らを犠牲にしてまでも、愛する家族を守ろうとする設定は全編を通して、現実味が薄い。しかし、それも気にさせないほど物語として上手く出来ている。いや、心理描写が丁寧な為、最初は現実味のない冷静で、聡明、家族思いの主人公の姿が、最後には受け入れられるようになってしまう。それほど、強く訴えるもの、強く心を惹きつけるものがある。強引とも思われる展開に、気づけば読者は納得させられている。また、残酷な結末はこの物語の中で最もリアルなのではないだろうか。結局、彼の選んだ方法では誰一人として、幸せになれなかった。現実是不安定で、不確かで、矛盾していて、足掻いても足掻いても、思うようにならない。どこまでも切ない。

本を閉じた後、いつまでも物悲しい余韻が残る。「静かな激怒が、ひたひたと心を満たして行く。それは、今までの、真っ赤な炎のような怒りとは、異なっていた。秀一の脳裏で輝いていたのは、鮮やかなブルーの炎だった。最も深い思索を表す色。だが、その色相とは裏腹に、青の炎は、赤い炎以上の高温で燃焼する。」秀一が義父を自らの手で葬り去ることを決意した印象深い場面である。「青の炎」のイメージがいつまでも心に重く残る。忘れられない1冊になった。

選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 竹内 富士雄

推理小説は私も好きだ。推理小説マニアには「本格もの」とか「倒叙もの」とか言う表現は知られているが、本作品は冒頭から倒叙推理小説という言葉が出てきて、推理小説すら読まない大学生に慣れ切っている私は「おや」と思った。私は「倒叙もの」はどちらかというと苦手である。推理小説という制約の中でも作者には自由に犯人の心理を描写する機会が与えられているため、ともすれば書きすぎて軽みのおどろおどろしい作品に成りがちである為である。しかし今回のコンテストには『青の炎』を対象とした作品が2編もあり、私の好みが世間とずれていることがよく分かった。さて、その2編の内では疑いもなく本作品の方が優れていた。批評者はこの主人公の描写を「懇切丁寧」と評しているように適度の客観性　たとえば「自らを犠牲としてまでも、愛する家族を守ろうとする設定は全編を通して、現実味が薄い。」というような　を以て原著に向き合う。原著に於ては主人公の犯意の描写に説得力が無ければ作品が成り立たないのは当然だが、批評者の犯意についての要約は論理的でかなり納得できる。表現としても「彼の愛するものを守るという揺るぎ無い思いには、強く訴えかけるものがある。」「独りで静かに青い炎を灯す、孤独な背中が目に浮かぶようだ。」という風な表現は新鮮さには欠けるが説得力がある。そして最終段落「本を閉じた後、いつまでも物悲しい余韻が残る。忘れられない1冊になった。」というのもなかなかうまい。全体として破綻のない仕上がりである。欠点としては「現実是不安定で、不確かで、矛盾していて、足掻いても足掻いても、思うようにならない。どこまでも切ない。」と言う風な手垢の付いた言い回しが多いのが若い人の作品としては気に掛かるところだ。もっともそれが作品の雰囲気伝えるのに役立っていると言えなくもないが。昔から推理小説の批評は結末を明かさないと不文律がある。然し倒叙ものでは犯人ははじめから分かっているし、トリックも最後には暴かれるという規約があるから、この批評を読んだ人が原著を読むに当たって興をそがれるということも無かるうし、大体結末なしにはコンテストの作品に成り得ないので良しとしよう。

受賞者から一言



第2回「京都産業大学図書館書評大賞」に応募することがゼミの夏休みの宿題でした。そんなきっかけで取り組みましたが、良い経験になりました。今回、優秀賞を頂いてとても驚き、喜んでいきます。本当にありがとうございます。



書名：『パン屋再襲撃』

著者：村上春樹

出版社・出版年：文藝春秋，1989

「『パン屋再襲撃』を読んで」

私にとって村上春樹の作品の中、この『パン屋再襲撃』が一番印象深かった。この話は短編だから、本をあまり読まないという人も入りやすいのではないだろうか。

この話は結論から言ってしまうと、何故か深夜にお腹をすかせて目を覚ました新婚夫婦がマクドナルドを襲撃してビッグマックを強奪する話である。しかも、三十個。ここで注目すべきポイントは、この夫婦が強奪したのはビッグマックだけ、ということである。コーラ二個のお金はちゃんと払う。これには理由があって、二人が襲撃したかったのは本当は「パン屋」だったからである。パン屋を探すが深夜二時に開いているパン屋なんてありはしない。そのとき妻の目に飛び込んできたのがマクドナルドの看板だった。パン屋ではなかったが、妻は「妥協も必要だ」といってマクドナルドに乗り込むのである。そもそも、どうしてパン屋を襲撃しようということになったのか。タイトルからもわかるように、以前パン屋を襲撃したことがあったのだ。今回のマクドナルド襲撃、いや、パン屋襲撃は二度目だったのである。夫は昔、相棒と一緒にパン屋を襲撃してパンを強奪した。正確には強奪した、という表記は正しくない。強奪しようと思論んで、夫はパン屋に行った。しかし、パン屋の親父は「ワーグナーを最後まで聞いたらパンを好きなだけ持って行っていい」という取引をしたのだ。結局、夫はその取引をのみ、パンを山のように持ち帰った。ここで、夫はこの取引に違和感を覚える。パンとワーグナーにはどんな関係があったのか。その違和感について相棒と議論しあったが、答えなんて見つからなかった。それだけの話なのだが、妻はその話に食いつく。当時相棒との間で覚えたその違和感を、今現在相棒である自分が共有してしまったのではないか。そう考えたのである。だから、深夜にもかかわらずこんなにもお腹がすいているのではなからうか。そして、この違和感を失くす為の唯一の方法は再度パン屋を襲撃して、今度はちゃんとパンを強奪することであると、そう考えたのだ。結果として、マクドナルド襲撃は成功して二人の飢えは満たされた。夫は妻に「こんなことは必要だったのか」と問う。妻は「もちろんだ」と答えて、眠りに落ちる。物語はそこで終わる。

この後、この夫婦がどうなったかは描かれていない。マクドナルドが通報して、捕まってしまうとか。何事もなかったように普通の生活を送るとか。ビッグマックを食べ過ぎて太ったとか。ビッグマック漬けの毎日で栄養失調になって倒れたとか。はたまたこの襲撃の是非で口論が耐えなくなって離婚したとか。これは想像の範疇に過ぎないが、どうなったのだろうと考えると面白い。私の希望としては、二人の間に生まれた子供が肥満児で、

それを「マクドナルドを食べたからだ」とか言って訴訟を起こして「食べなかったらいいじゃないか」という当たり前の判決を言い渡されて負けて欲しい。……とまあ、これは何年か前のアメリカの実話だが。この話の面白いところはマクドナルドにあると思う。マクドナルドという身近な存在を題材にすることで、読み手が作品に入り込みやすいのではないだろうか。マクドナルドに行ったことのない人は今ではもう少ないであろう。読みながら、よく行くマクドナルドの店内を想像する。ああ、「いらっしゃいませ、こちらでお召し上がりでしょうか」と営業スマイルで言われるのだろうとか、ポテトはカリカリがおいしいんだよとか、そういえば最近食べてないとか。そんなどうでもいい事を考えながら、その空間にビッグマックを強奪するために男女が乱入してくるというシーンを組み込む。そんな「マクドナルド」と「強盗」のミスマッチさが面白い。ミスマッチのくせに、簡単に想像できてしまうところも面白い。

また、この話の中で印象に残ったのは「女性の実態の描写の上手さ」である。作中の夫は時の流れに身を任せ、という感じだが、妻は違う。思い切りの良さとも言うのだろうか。ぐいぐいと夫を引っ張って、襲撃を成功させてしまう。きっとこういう女性に限って普段は大人しい良い妻なんだろうな、と思うのだが、いざとなったらやはり女は強いと思った。読んでいて妻の切り替えの速さや要領の良さが滑稽にさえ見えてくる。自分が深夜にお腹をすかせたのは夫の呪いが飛び火したから、じゃあ呪いをなくせばいいじゃない、パン屋がないならマクドナルドでいいじゃない(この発想がマリー・アントワネットのようだと感じるのは私だけだろうか)。私の周りの女性でこういう考え方をする人は少ない。作者は女をよく分析していると感じた。

私にはパンとワグナーの違和感はわからない。そんな取引、パンを貰えたからいいじゃないか。こう納得してしまっただけでこの違和感に気付かないのは、きっと私が鈍感だからではなくて女だからなのだろうなあ、と思った。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 池田 哲郎

村上春樹についての書評である。1989年の原著という意味で書評はあまり評価できないが、書評文は悪くはない。

それは原著の特徴による。まず、構図が分かりやすくしっかりとしている。しかも、カラッとしている。次に、内容も、阿部公房『砂の女』や『箱男』のようである。つまり、途方もない、ついてゆけないのだが、人はみなどこかで似たようなことは思っているかもしれない。こういう二つの点で、村上春樹が「ノーベル文学賞候補」になるのだろう。担当者が感じるところでは、最近のノーベル文学賞にはヨーロッパ的普遍性がみえる。川端康成にしても大江健三郎にしても正反対であるようで、その普遍性において共通している。

翻って、書評者の指摘であるが、すべて正解だと思う。ただ、「女性(原文:女)をよく分析している」というのはどうだろうか? 実は誰だってよいのである。近くにいる赤の他人は冷静、的確かつ合理的にものを考え、行動をおこす。ひごろ体験して唖然とし納得させられるオチである。

受賞者から一言



今回の受賞にとっても驚いています。両親も受賞の知らせに驚いたらしく、普段連絡してこない父から「おめでとう」と電話をもらいました。照れくさいけど、嬉しいものですね。書評を書くにあたって本を何冊も読みました。最近あまり読書をしていなかったのですが、書評大賞に応募させていただいたことで、本の良さを再確認できたと思います。



書名：『ヒロシマはどう記録されたか：
NHKと中国新聞の原爆報道』

著者：NHK出版編

出版社・出版年：早川書房，2004

「昭和二十（一九四五）年八月六日午前八時十五分、広島に投下された原子爆弾は、地上五百八十メートルの上空で目もくらむ閃光を放って炸裂し、小型の太陽ともいえる灼熱の火球を作った。（中略）この人類史上初の原子爆弾が広島市民の頭上で炸裂した瞬間、三十万市民の多くが死傷し、建物のほとんどが跡形もなく倒壊、焼失して、それまでの人々の暮らしや営み、町の文化や歴史が消滅、広島は壊滅した。」（本書「はじめに」より引用）

本書はそのタイトル通り、原爆投下前後の広島について、実際に被爆したNHK（日本放送協会）中国放送局と中国新聞職員らの証言を基に再構築し、真実として語られる歴史的資料である。投下直後の市民の混乱、その中でメディアが果たそうとする使命感、それを阻む「戦時下」という状況。そして何より、現代に生きる私たちでは到底想像も及ばない悲惨な体験。原爆投下からその後数十年に渡る市民運動の行く末までを通して語ることで、私たちにヒロシマを教えてくれている。

本書第六章では、8月6日に爆心地付近で中国新聞記者に撮影され、今日唯一残っている5枚の写真など貴重な資料を交えながら、その時の惨状が伝えられている。当時の新聞・放送といったメディアは、国民を戦争へと向かわせる情報戦略の重要な拠点として軍の管轄化にあった。しかしそこに在籍する記者や局員たちは、「お国の為」でなく人々が生きるための報道を、またこの時点で後世にこの悲惨さを伝えることをも考えて、原子の炎で焼かれた郷里を走り回った。「戦時下」にあっても、報道者としての正しい感覚を失わず、報道者としての使命を忘れなかった功績は大きい。後に中国新聞は、当時軍からの要請により発行出来なかった原爆の真実を『原爆新聞』として様々な資料とともに発行し、NHKの制作した原爆特別番組は全世界で放送され、「核の冬」という言葉とともにこれを伝えた。この功績から、私たちは何かを感じ、考えなければならない。

広島出身である私は、毎年のように平和学習で平和記念資料館を訪れ、当時を再現した蠟人形や様々な展示資料によって、凄まじい恐怖という印象をもって原爆の恐ろしさや戦争の痛ましさを実感してきたつもりである。しかしこのような感覚的な体験とは別に、文章によってヒロシマや戦争を読むことによって、また、小中学生であった当時にはなかった思考力によって、たった今私たちが取り組まなければならない問題を考える足掛かりを得られたように思う。

例えばつい最近総理大臣に就任した安倍晋三首相は、所信表明演説で憲法改正に前向きな姿勢であることを語った。これは日本が軍隊を持ち、戦争に参加するための第一歩である。ずっと以前から国会や各メディアで取り上げられている憲法改正、第九条の見直しといった問題に関して、私たち学生はしっかり考えることが出来ているのだろうか。そしてそれを自分の主張として言葉に出すことが出来ているのだろうか。

日本の平和憲法はアメリカが日本の軍事力を放棄させたいが為に押し付けたものであ

る。また、60年以上経っても何の修正もしていない憲法は今の状況にそぐわず、これを改正して有事に対応出来るようになってこそ、日本は国際社会の中で一人前と認められる、といったことを主張する人は確かに沢山いる。しかしこれは、各メディアで多くのコメンテーターや評論家、記者が主張している内容をただ受け売りで語っているだけということはないだろうか。

60年以上経っていようが押し付けであろうが、「国際紛争を解決する手段としての戦争」を放棄した上で「正義と秩序を基調とする国際平和」を目指すことは正しい、という考えがあっても良いと思う。また、アメリカからの押し付けであることを憲法改正の根拠にするなら、今論議されている憲法改正もまさに、今になってアメリカが自分達の戦争を手伝って欲しいからこそ日本に迫っているものであり、やはり押し付けであるということに気が付かなくてはならない。しかし実際に北朝鮮が攻めてきたらアメリカに頼らざるを得ず、やはり日本独自の軍事力が必要であると言うのなら、ではこれを国際外交で解決する手段は無いのか、という議論をするべきである。

私は護憲や平和主義を唱えるべきだと述べているわけではない。多くのメディアから流れてくる偉い人たちの言葉を鵜呑みにするのではなく、自分達の言葉で考えるべきだということを言いたい。それが戦争やヒロシマ・ナガサキを体験し、平和憲法を掲げている私たちがすべきことだ。戦争によって知らない場所で知らない人が死んでいくことに私たちはいつの間にか加担しているかもしれない。そういった危機感を私たちは持ち、語るべきである。それが、正しい感覚を持って報道の使命を果たした、本書に登場する記者・局員達が残してくれたものであり、それを私たちは読み取らなければならない。

選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 高尾 英弘

本書評の対象書籍は、NHKおよび中国新聞によってヒロシマ原爆がどのように記録されたかを明らかにする歴史的資料である。この点において、本書の書評は、小説や解説書などの書評とは異なり、対象とされた資料の持つ社会的意義を明らかにし、その現代的意味を考えるという作業を避けて通ることはできない。

本書評は、この困難な作業に正面から取り組んだ秀作である。すなわち、原爆報道という本書の素材を手がかりとして、メディアの果たすべき社会的役割を指摘するとともに、歴史から学ぶことの大切さを明確に示している点で、他の応募作にはみられない特徴を有している。そして、本書がどのように自分の考えに影響を与えたかを明確に意識し表現している点で、なによりも地に足のついた書評であるといえる。

様々な意見の氾濫する現在において、書籍を通して事実を知り、自分で考える姿勢の大切さを明確に示している点において、このような書評は貴重であり、かつ高く評価されるべきである。

受賞者から一言



去年に続き、まさか二度も受賞できるとは思ってもみなかったもので、とても驚いています。また、自身の故郷広島に関する書物で受賞出来たというのも非常に嬉しく思います。三度目の正直という言葉信じて、来年こそは大賞を狙えるよう頑張りたいです。



書名：『コーポレート・レピュテーション』

著者：チャールズ・J・フォンブラン
セス・B・M・ファン・リール
電通レピュテーション
・プロジェクトチーム 訳

出版社・出版年：東洋経済新報社，2005

「私たちは何ができるかで自らを判断するが、他人は何をしたかで私たちを判断する。」
という格言が本書では用いられる。私たちが好むと好まざるに関わらずに評判や風評というものは、常に話題になり、私たちの周りを取り囲む。それは人だけでなく、企業とて例外ではない。時に人の行動や、企業の存続を左右するものにまでなっている。

現代社会は企業のレピュテーション（評判、風評の意）を巡る情報で溢れている。しかし、その多くが芳しくない情報、企業の不祥事や違法行為、犯罪容疑などであり、そうした事件の発生の中、名声を地に落とす企業も多く存在した。消費者の信頼を大きく傷つけ、倒産する企業もあった。その一方で、高い称賛を浴び、名声を手に入れ、なおも成長を続けている企業も数多くある。まるで、レピュテーションが企業の盛衰を左右しているように映る。本書は、原作のタイトル『Fame and Fortune』（名声と富）のように、名声と富の関係について論じている。レピュテーションとは何かを定義し、どのように測定、マネジメントしたらよいかについて調査検証を行い、レピュテーションが企業に富をもたらすことを初めて科学的に証明しようとしたのが本書である。

本書は全 11 章で構成されている。第 1 章「レピュテーションはなぜ重要か」では、著者の問題意識の 1 つである、従来の消費者視点だけではなく、さらに広いステークホルダー（顧客、従業員、投資家、地域社会などと言った企業の利害関係者）視点で考えることの重要性が強く主張されている。またレピュテーションとステークホルダーの評価は相互に影響していることが、様々なステークホルダーの視点から、詳細な事例を用いつつ論じられている。続く、第 2 章「レピュテーションの価値はどれくらいか」から第 4 章「名声から富へ」では、レピュテーションが財務的価値（富）をいかにして創造するかという仕組みと、レピュテーションの財務的価値に対する定量的な検証が行われている。ここで、名声と富との関連性に初めて、調査検証というメスが入られるのである。さらに、著者らが開発したレピュテーション指標を用いて数値化された、米国、欧州、オーストラリア（残念ながら日本は存在しない）のトップ・レピュテーション企業のランキングは、ある種のコンテストのようで、経営学を学ぶ者でなくとも心躍る所であろう。第 5 章「名声のルーツ」では、トップランク企業の卓越性を徹底的に検証し、優れたレピュテーションを構築するための重要な要因を 5 つの原則「顕示性」「独自性」「真実性」「透明性」「一貫性」の形にまとめている。そして、第 6 章から第 9 章において 5 つの原則を順次取り上げ、豊富な事例と検証を交えながら、個々の原則をいかに高めていくかを論じ、結びとして第 11

章「トップ企業になるには」では、ケーススタディを通して、レピュテーション・マネジメントの重要性を実証している。

私が本書を評価するのは、レピュテーションと言う無形資産を測定指標を用いて定量化し、財務的価値との関連性を科学的・統計的に明らかにしたからである。現代の企業では無形資産に対する関心が高まり、無形資産こそが企業の明暗を分けるとまで考えられるようになってきている。知的資本や特にブランドと言ったものに、より一層関心が集まる一方で、その無形資産の価値や財務的価値との関連性を実際に測定しようとする調査は少なかったと言えるだろう。理論の構築だけが先行し、マネジメントに必要な測定指標を考えることが抜け落ちていたように感じる。それに対して、評判や風評といった概念を企業の無形資産の一部としてマネジメントの対象と定義し、測定指標を開発、マネジメントすることを提唱した本書の意義は大きい。

一方、批判的に見ると、レピュテーションとブランドの定義に厳密さに欠ける面がある。著者は、ブランドはレピュテーションに含まれるものであるというスタンスを取っているが、近年ではステークホルダーを含む視点をもつコーポレート・ブランド論も少なくなく、ステークホルダー視点だけでは十分だとは言えない。数多あるブランド論の海に埋もれないよう、より一層の峻別が求められるであろう。

「捉えられるすべてのもののなかに重要なものがあるとは限らず、重要なものすべてを捉えられるわけではない」という格言が本書では用いられる。本書は、無形資産という捉えにくいものに新たな一石を投じる一冊である。経営学を学ぶ学生だけでなく、企業家にもお勧めしたい。

選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 小田 秀典

川村君の書評は、以下の3点で優れている。第1に、新しい研究書を選んだこと。良い本を選ぶことは良い書評を書くための必要条件である。第2に、内容が、面白かったとか役に立ったという主観的なものではなく、図書を社会の現実と科学の進歩のなかに客観的に位置づけていること。高校生の読書感想文ではなく大学生の書評の条件を満たしている。第3に、構成がしっかりしていること。自然な話題の導入(第1段落)に続いて、図書の主題の現実世界での重要性と研究書としての図書の意義(第2段落)、図書の章別内容の要約(第3段落)、図書に対する川村君の肯定的評価(第4段落)、同君の批判(第5段落)が要領よく述べられ、纏められている(第6段落)。以上の美点は川村君の日頃の学習を反映するものだと思う。

物足りない点を述べれば、著者のレピュテーションとブランドの定義が曖昧なことは指摘されているが、この問題をめぐる既存研究との関連や今後の方向性についての議論がないことである。第3段落を削って第5段落を充実させれば、もっと高い評価を得られたにちがいない。とはいえ、これは限られた字数のなかで難しかっただけなのだろう。川村君は、今回の経験を活かして卒業研究などに取組んでほしい。

受賞者から一言



第2回書評大賞優秀賞を頂きありがとうございます。嬉しく思います。この度受賞できたのも、日ごろ、お世話になっている川又ゼミ生の皆さんと頑張ってきた結果です。この場を借りて、皆にお礼を申し上げます。書評を書くことから学ぶことは、とても多いので、今後も機会がありましたら、積極的に取り組みたいと思います。ありがとうございました。



書名：『旭山動物園のつくり方：
「伝えるのは命」最北の動物園
からのメッセージ』

著者：文）原子禅
写真）亀畑清隆

出版社・出版年：札幌：柏艫舎

東京：星雲社，2005

「『旭山動物園のつくり方』を読んで...」

北の地の小さな動物園～旭山動物園が2004年夏、月間入園者数日本一に輝いた。交通の便がいいとはいえない、パンダやコアラ、ラッコのような希少種がいるわけではない。この動物園にでもいるようなごく普通の動物たちのいるいたって普通の動物園がなぜそれほどまでに人々をひきつけるのか。本書には旭山動物園のたどってきた険しい道のりとそれでも命を伝えようと懸命に試練に挑み続けた飼育員たちの姿が記されている。そこから旭山動物園の魅力の秘密を見つけることができる。

旭山動物園は、'67年に市民の要望によって開園した。初年度から順調な入園者数を記録し、その後も長年市民の憩いの場として愛されていた。しかし人々のニーズの変化や施設の老朽化などに伴って入園者数は徐々に減少していった。そこに壊滅的な打撃を与えるある事件が起こってしまう……。その結果、来園者数は激減。その後も風評被害の傷跡は深く、廃園の危機にさらされてしまう。しかし、そんな状況の中でも飼育員たちは自分たちが魅せられた動物たちの複雑さ、美しさ、優雅さ、すごさ、そして尊さを少しでも人々に伝えようと試行錯誤を繰り返した。飼いならされたかわいだけの動物ではない“本来の動物たちの姿”を知ってほしいという一心で。

旭山動物園の変化は“ワンポイントガイド”の実施から始まる。一番動物たちのことをよく知る飼育員たちが直接来園者に動物たちのことを伝える。直接来園者数に結びついたわけではなかったが、今につながる旭山動物園の大きな一歩となった。また、動物たちのことを伝えるなかで飼育員たちに芽生える思いがあった、「こんな施設ができればもっと動物たちのすごさがわかりやすく伝わるのに……」と。そうして膨らむ夢は14枚のスケッチとなり“旭山動物園の素”となった。

そうして着実に変化していく旭山動物園に大きなチャンスがおとずれた。長年培ったアイデアを武器にこのチャンスにしがみつき、見事ものにした。こうして得た大きな予算で夢の最初の一歩となる新施設が誕生した。ここから旭山動物園の快進撃が始まる。

最初の新施設“こども牧場”はこどもたちに命とのふれあい、野生との関わり方を伝える旭山動物園の考え方を端的に伝えるものとなった。その後、旭山動物園は次々に独自の新しい施設を誕生させていく。ペンギンたちが水中を飛ぶ“ペンぎん館”、アムールヒョウが頭上でくつろぐ“もうじゅう館”、地上17メートルの綱をオランウータンが悠々と渡る“空中放牧場”、ホッキョクグマの豪快なダイブがみものの“ほっきょくぐま館”、大きな

鳥かごに人間が入っていく“とりの村”……、魅力的な施設はまだまだある。これらの施設に共通するのはただひとつ、本来の動物たちの姿を伝える、命を伝えることである。

また、旭山動物園の“命を伝える”という思いを園内の随所に見ることができる。各獣舎には赤と青のパネルが設置されている。赤には新しく生まれたり、来園した動物の情報が、そして青には死んだ動物の情報が記されている。“死”があつての命だから、ありのままを伝えたいという思いからである。

旭山動物園で見られる動物たちは決してかわいいだけの見世物ではない。これが本書を読み終えた感想である。旭山動物園にいるのはそれぞれが個性的で、精一杯に命を輝かせながら生きる動物たちである。ここはアフリカのサバンナではないし、ジャングルでも、南極でもない。ここは決して動物たちの暮らす本来の野生ではないし、永遠に同じになることはない。しかし、旭山動物園で暮らす動物たちは野生で暮らす動物たちの姿を教えてくれる。そして私たちは身近に暮らす動物たちやはるか彼方の地で暮らす動物たちの命を感じることができる。そしてさらには生きることとは何かをも感じることができるのではないか。また、一方で本来の野生ではない場所で暮らす動物たちの姿はまるで野性を捨てて生きる人間の姿にも見えてくる。動物園は、動物の野生の姿を、命を私たちに伝え、また一方では野生を忘れていく人間の姿を映し出しているように思う。

「たかが動物園」とは言わせない驚き、発見があふれている。一言では語りきれない深い世界がそこにはある。これが人々を旭山動物園に向かわせるのではないか。

動物園に行きたくなる一冊である。

選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 高尾 英弘

書評を書く場合、対象とする書物が伝えようとしている内容をきちんと読みとって書評の読者に示すことが必要である。ところが、この作業は決して簡単ではない。書物が伝えたいメッセージを読み損ねることもあるし、これをきちんと理解したとしても、分かりやすく表現するには一定の技術が必要だからである。

本書評は、この困難な作業をみごとにこなしている点で、最も典型的な書評のスタイルに沿った秀作であるといえる。実際にこの書評を一読すれば、本書評は、読みやすい文章を用いつつ、対象書籍の有する意義を明確に読者に伝えていることがわかるだろう。

すなわち、本書は旭山動物園の単なる成功談ではなく、動物園の存在意義を人々に伝えるための書物である。本書評はこのことをきちんと読みとり、書評の読者に伝えることに成功している。おそらくこの書評の読者の多くが本書を読んできたくなるだろうし、旭山動物園に行ってみたくなるのではないか。優秀な書評は、読者の興味をかき立てる力を持っていることを示すよい例である。

受賞者から一言



このような賞をいただくのははじめてで、まさか選ばれると思っていなかったのととても驚いています。自分の書いたものを評価していただいととてもうれしく思っています。これからもたくさん本を読んでいきたいです。



佳作

宇津木 健



書名：『ブータン自転車旅行：
ヒマラヤの秘境六〇〇キロを
マウンテンバイクで走る』

著者：九里徳泰，林美砂

出版社・出版年：山と溪谷社，1995

「自転車の先にあるもの。」

誰もが「自転車」という乗り物に乗ったことがあるだろう。小さなころは、ただ乗ることが楽しくて、意味もなく乗り回していた人は少なくないはずだ。中学生、高校生となり、過去のそれは移動の手段としてしか使われなくなってきた。自転車が目的地に着くための移動手段であるならば、それは代わりに原付やバイクでいいわけである。では、自転車の魅力とは何か。それは走る過程、走ること自体にあるのだ。それがこの本を紹介した二つある理由の一つである。もう一つの理由は筆者も本の中で取り上げている「幸福とは何か」というテーマについて読者にも考えて欲しいからだ。日本は発展という名の下にがむしゃらにつき進んできた。結果、手に入れたものは、ぎゅうぎゅう詰めの通勤電車に世界有数の車の渋滞、そして世界一高い食料とサービス。たしかに物には不自由しない経済的に恵まれる社会になったけれど、何かをおいてけぼりにしてないだろうか。日本に対して経済的には決して幸福とはいえないブータンであるが、旅行関係者の間では理想郷と呼ばれている。この本でその理想郷の全貌を明らかにしていく。異なった生活、異なった文化を知った上で、あなた自身の「心の幸福」については是非見直してもらいたい。

筆者はツアーコンダクターの林美砂さんとジャーナリストの九里徳泰さんの二人である。舞台はインドと中国にはさまれたヒマラヤの小国、ブータン。この国は未だに観光客が多いとは言えない世界に残された秘境と言われている。600キロにも及ぶヒマラヤの秘境を一ヶ月間の期間で制覇したことを記している。筆者がこの国へ行くことになったきっかけは、ネパールで会ったジグミという人物によるものである。彼は日本に大変興味を持っており、もうすぐ旅行会社を始めるといふ。ツアーコンダクターである筆者に是非一度下見に来てほしいとのこと。筆者の希望からブータンをしっかり堪能するために、ほとんどをマウンテンバイクで一ヶ月間の旅をすることになった。何十回のFAXのやりとりやややこしい手続きも終わり、いざブータンへ。

計画したルートは約600キロ。7つの峠があり、うち6つは3000メートルを超える半端なく急勾配な峠である。標高7500メートルを超えるヒマラヤの高峰から100メートルの低地までブータンの土地は起伏に富んでいる。道路がないところは足で歩き、のこりはマウンテンバイクで行動する。人力だけの旅は進むスピードが遅く、自動車等で移動するより見えるものははるかに多くなるのだ。車と自転車で異なるものは移動する時に見える世界だけではない。車で旅行する人は距離でなく時間をものさしに旅をするが、自転車での旅は距離と坂の勾配と路面の状況、気温、風、食料・水補給事情など複雑な条件をこれま

での勘から割り出し行動計画を決めるのだ。予想がつく工程に行くのと、不安なまま走るのでは同じ距離でも前者の方が楽に走れるのだ。

旅は新しい出会い、発見、感動の連続である。偶然出会った人が家に招待してくれ食事をご馳走してくれ、さらには泊めさしてくれる。夜の峠には光がなく頼りはヘッドライトだけという時もある。黄金色に輝く朝日は世の中にこれほど美しいものがあるのかと思わせる。しかし旅先では多くの問題も起こる。タイヤのパンクは当たり前、テント場がなかったり、水を補給する場所がなかったり。そうした時、助けてくれるのは現地の人である。日本ではどこでも簡単に手に入る水だが、ブータンではそのようにいかないようだ。自然に入れば豊富な水がすぐ手の届くところにあることは多い。それでも、その水をそのまま口に含むことのできる場所は以外にすくないのだ。ましてや自分たちの人力だけで移動する場合、自分たちで持てる水の量には限りがあるのだ。筆者は家でのほほんと生活していると、蛇口をひねればふんだんに出てくる水やお湯のありがたさに気づくことなく無駄に使ってしまう自分を反省したようだ。旅をすることで、日常の自分がいかに必要のないものを持ち、必要以上に無駄遣いしているか身をもって感じさせてくれる。学校の教科書より何倍も意味のあることを旅は教えてくれるのだ。

実体験から考えさせられることも多いが、旅中の筆者の心情や行動も細かく書かれている。写真も掲載されているので、イメージしやすい本となっているため、まるで自分が旅をしているように錯覚する場面もあるかもしれない。わたしはこの本を読んで自転車の旅に出てみたいと心から思っている。せわしくなってしまった日本に生きるせわしい人にこそ読んでほしい一冊である。

選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 高嶌 英弘

とにかく面白い書評である。冒頭で、本書が「心の幸福」について考えさせられる書物であると述べたあとは、600キロにわたるブータンの自転車旅行のようすが淡々と叙述されているだけなのだが、その淡々とした描写が、逆にこの旅の生き生きとした情景を、書評の読者にまで伝えている。おそらく書評の筆者自身、このような旅が大好きなのだろう。そうでなければ、本書で生き生きとした旅の描写がなされているとしても、それをうまく書評の読者にまで伝えることはできない。そして実は、私もこのような旅が大好きなのである。書評の末尾には、本書を読めば読者は自分が旅をしているように錯覚するかもしれないと記されているが、書評を読んだだけで、私も旅人に共感を覚えた。

多忙な現代人に旅へのあこがれをかき立てる書物であることをストレートに伝える、素直で貴重な書評である。

受賞者から一言



入賞できるとは夢にも思っていなかったので本当に驚きました。僕の書評でこの本に興味を持ち、原本を読んでいただけたら幸せです。ぶらりと自転車で旅に出ただけならもっと幸せです(笑)。僕の方は来年の長期休みを利用して、北海道か沖縄に二週間ほど自転車でほほん旅をしようかと思っています。みなさんも楽しむ気持ちを忘れずに！



佳作

田村 朝美



書名：『24人のビリー・ミリガン：
ある多重人格者の記録』(上下巻)

著者：ダニエル・キイス
堀内静子 訳

出版社・出版年：早川書房，1992

「もうひとつのテーマ」

私が書評の題材に選んだのは『24人のビリー・ミリガン』という本である。この本は、ビリー・ミリガンという多重人格者を題材にしたノンフィクション小説である。多重人格というショッキングな内容のためにテレビで特集を組まれることもあり、話の内容は知っているという人が多く、私も3年程前にテレビの特集を見てこの話に興味を持ったという経緯を持つ。また、著者であるダニエル・キイスは他にも『アルジャーノンに花束を』などを執筆しており、これは日本でもドラマ化されたため、馴染みのある作家であると思う。

さて、この『24人のビリー・ミリガン』の内容は、先ほど述べたように多重人格者の物語である。1977年、アメリカのオハイオ州で一人の男が逮捕された。容疑は3件の婦女暴行と強盗。それがビリー・ミリガンである。しかしビリーは罪を否認し続け、拘留所内で2度も自殺を図った。自殺未遂以外にも常識では考えられない行動をとったため、精神的に裁判を受ける能力がないと判断され、精神鑑定を受けることとなった。しかし、このカウンセリング中にビリーは奇妙なことを言い出す。「僕はビリーじゃない。デービッド。」その言葉を不審に思った担当心理学者が「ではビリーはどこ？」と問うと、デービッドと名乗る男は、「この中で眠ってる。」と、自分の胸を指した。心理学者はビリーが多重人格者である可能性があると感じつつも半信半疑だった。この後も粘り強くカウンセリングを続けていくうちにビリーの中には24もの人格が存在していることが分かった。そしてビリーと接した多くの人が多くの人格の存在を認めるようになったのである。

この物語に登場するビリーの中の人物たちは皆個性豊かで、ひとりひとりに魅力が溢れている。凶暴といわれる人格にも女と子供には暴力を振るわないというポリシーがあったり、軽犯罪を好む人格にも少年らしい好奇心が見えたりと、何か憎めない要素がある。しかし、多重人格という大きなテーマのほかに、社会の裏の描写が見え隠れしているのも特徴である。なぜビリーが多重人格になったのか。少年期に実の父が目の前で自殺、母の再婚相手である義父による性的虐待、その過酷な状況に耐えるために次々と人格が生まれたという。つまり、多重人格は生き残る術だったのだ。しかしその人格たちが、ビリーの知らないうちにタバコ、麻薬、強盗に手を汚していく。だがこのような描写は特別な描き方をされている訳ではない。麻薬や窃盗がごく普通に、日常的な出来事として描かれるのである。ビリーのおかれた状況は、決して特別なものではなく、誰にでも有り得る状況なのだと訴えられているような錯覚に陥った。

この本は純粋におもしろいと感じ、一気に読み終えてしまった。ただ、登場人物が多すぎるために、私は人物をメモしながら読まなければならなかった。また、物語を描く上で仕方のないことではあるが、ビリーを擁護する内容に偏っている印象も受けた。記憶喪失や多重人格というのは証明する方法が未だに確立されておらず、この話が真実であるとも嘘であるとも証明する術はないのである。よって、この『24人のビリー・ミリガン』が現実の話かどうかはビリー自身にしか分からない。しかし心理学者の意見や世論は賛否両論述べられており、論理的な見解が芯にあるので、再読にも耐えうる図書だと感じた。

私自身、多重人格を丸ごと信じるつもりはない。演技ということも十分考えられるからである。しかし、ビリー・ミリガンの物語は非常に緻密で、現実だと信じられる要素は十分にある。24人のビリーを、それぞれ違う人物であると受け入れることで、本当に物語を楽しんで読むことができると思う。そして、現実のビリー・ミリガンは、初めて法律によって多重人格を認められた人物として無罪となった。そして1991年、逮捕から実に13年の時を経て釈放された。現在は名前を変え、アメリカで生活しているという。私がこの物語から読み取ったものは「ビリー・ミリガンという男の悲劇」だけではなく、私たちが生きる社会に対する警鐘でもある。これが私の思う、もうひとつのテーマである。

選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 高嶋 英弘

この書評が何よりも優れているのは、多重人格というテーマおよび作者について要を得た紹介がなされている点にある。多重人格がわが国でもテレビで特集を組まれるほど現代的なテーマであること、作者が日本でもドラマ化された『アルジャーノンに花束を』の執筆者であることなど、短い文章の中に、書評の読者が本書を手にとってみようと思わせる要素をしっかりと盛り込んでいる。

また、書物の概要が、客観的かつ分かりやすく紹介されている点においても優れている。いたずらに作者の心情に深入りすることなく、テーマの意義を客観的に紹介するという難しい作業に成功していると評価できる。

他方、内容に対する批評ないし評価という点では、本書が現代社会に対する警鐘でもあると述べるにとどまっており、物足りない感が否めない。多重人格という現象が現代社会において有しうる意味を自らの視点で検討し、本書の現代的意義を述べる試みがあれば、よりまとまった書評になったと思われる。

受賞者から一言



まさか自分が受賞をできるとは全く考えておらず、その知らせを聞いたときには、嬉しさよりも驚きが先行してしまいました。書評で素晴らしい賞を頂くことができましたが、普段から読書をするほうではなく、今回応募した作品もたまたま読む機会があったものでした。しかし、この本は自信を持ってお勧めできる作品なので、この機会に興味を持っていただければ幸いです。また、これからは私自身ももっと興味を持って本を読んでいきたいです。本当にありがとうございました。



佳作

みよし ゆり え
三好 由里恵



書名：『東京タワー：

オカンとボクと、時々、オトン』

著者：リリー・フランキー

出版社・出版年：扶桑社，2005

「ぐるぐるぐるぐる、ぐるぐるぐるぐる。」

これは本文内で幾度か見られる表現である。これこそが、この本の著者であり主人公でもあるリリー・フランキー氏が、生きていく中で感じずにはいられない矛盾や葛藤に対しての最も適切な表現だったのだろう。そしてそのように感じるのは恐らく著者だけではない。誰しもが生きていけば一度は感じる、或いは感じたことがあるような矛盾や葛藤に対して著者は上手く代弁してくれたと私は思わずにはいられない。人々はそれらの矛盾や葛藤と懸命に向き合おうとする。悩み、もがき、しみながらも様々な思いを巡らせる。その末で挫折する事も当然ある。そして、いずれ悟る。世の中には必ずしも理解できないこともあれば、上手いかないこともある。それでも人々は「ぐるぐるぐるぐる、ぐるぐるぐるぐる。」と現実と対峙し悩み、迷う。それは一見愚かで無意味な行いに見えるかもしれない。しかし私は決してそのようには感じない。そうした過程の中で、或いはその過程を通して人々は確実に成長を遂げていくのだ。本書を読み、著者の矛盾や葛藤と闘う姿を見て私はそう感じた。

本書は福岡の小倉で生まれた著者の自由奔放とも言える人生の自伝である。彼にとっての「オカン」の存在がいかに大きく、偉大であったのかは本書を読めば一目瞭然である。文面からも彼の「オカン」に対する愛がひしひしと感じられる。そして私たちは自分の母親を思わずにはいられない。母親はいつの時代も、逞しく偉大だ。子を想う母親の想いに勝るものはない。果たしてこれは必然的に、そして潜在的に備えられたものなのだろうか。その真意は分からないしここでは触れないでおくが、本書を読めば改めて母親の存在について考えさせられる事は必須だろう。そして感謝し、孝行しようと思う人も多いだろう。しかしいくら感謝し孝行したところで、著者がそうであるように完全な孝行なんて存在しなければ、後悔の念が完全に払拭されることはほぼ不可能に近いのではないか。これは母親を持つ全ての人間に与えられる永遠の難題ではないかと思う。その難題をどう克服するかは私たち自身の問題であり、避けては通れない問題なのである。

本書で描かれる「オカン」はまさに理想的な母親である。親近感とどこか懐かしさを抱かずにはいられない。あたかも自分がその場にいるような錯覚を覚えさせる程に著者の状況描写が細かく丁寧な点が活かされて、その効果がより際だっていたように感じる。同時に心理描写も秀逸で、その中でも特に彼の最愛の「オカン」が亡くなって初七日が過ぎようとしていた日の彼の心境には、思わず感情移入して込み上げてくるものがあった。飾ら

ずに亡き「オカン」に優しく語りかけるように綴られたその言葉たちは、きっと私だけではなく多くの人々の心を動かす力を持っているだろう。

東京に来れば何か変わるかもしれない、そう思って著者は大学進学を機に上京してきた。その考えは依然として根強く残っている。しかし、現実はそう甘くはない。東京はそんな漠然とした思いでただ「何となく」上京してきた者に対しては厳しく残酷であった。事実、著者も貧しく苦しい生活を長い間送っていた。しかし、著者の東京での生活が不幸であったとは思わないし、勿論著者自身もそうだろう。むしろ病に冒され上京してきた「オカン」と過ごした東京での生活は、彼にとっても、「オカン」にとっても最も満たされた日々であったように思う。今まで色々なところを常に気兼ねしながら転々と移り住み、互いにそこを自分の居場所だと感じたことがなかったという彼らにとってはこの上なく穏やかで至福の日々であったと。東京での彼らの暮らしは、多くの良い人たちに恵まれて実に温かいものであった。それは恐らく著者と「オカン」の人徳におけるものなのだが、読んでいても幸せな気分になった。当たり前な日常の中に存在する些細な幸せは普段は見落としがちであるが、その掛け替えのなさとし難さを、本書を読んで思い出した気がする。

本書を読めば母親の見返りを求めないその優しさと強さを感じ、改めて自分の母親へ感謝の気持ちを今しっかりと伝えようと思う人は多いだろう。そして同時に私は考える。いずれ母親になるだろう自分も、そんな強さや優しさを備えた母親になれるのだろうか。いずれにせよ、母親を持つ全ての人々に是非本書を一読して欲しいと思う。そしてあなたたちの「オカン」に対して改めて「ありがとう」の一言を口に出して伝えてもらいたい。

選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 竹内 富士雄

不明にして私は本作品の原著『東京タワー：オカンとボクと、時々、オトン』がベストセラーになっていることを知らなかったので、今回のコンテストに本書を対象とした作品が6編もあったのには一寸驚いた。その中で本編が一番よく書けている。まず批評者と原著者の距離の取り方がうまい。他の作品では批評者が原著者にべったりとなってしまうのにこの作品では「私」が原著者を見つめる目があり、それが批評者の「大人」を感じさせる。では文章はどうか。他の作品に幼稚な表現が目立った中で、本作品の文章のうまさは群を抜いている。「矛盾や葛藤」「対峙」「状況描写」などの用語の使い方も適切で、手練れの批評家の文章としても殆どそのまま通るかと思わせるうまさだ。難しい最終段落も殆ど感動的と言えるくらい上手に纏めている。技術的なことを一言すると、「人徳における」という表現に唯一引っかかった。でもその後の「当たり前な日常の中に存在する些細な幸せは」と来て、ああここで処世訓を述べられるといやだなと思わせるところで、「本書を読んで思い出した気がする」とさっと引くところは小憎らしい位だ。本批評者が既に一流の文章の書き手であることは間違いない。この次は更に「心理描写」等のどちらかと言えば月並みな表現を使わない新鮮な文章を目指してほしい。

受賞者から一言



このような素晴らしい賞を頂き、大変光栄に思います。今回、書評を書くにあたって気付いたのは自分の表現力のなさでした。感想文とは違い、客観的に伝えることは想像以上に難しかったです。大変良い経験になりました。本当にありがとうございました。



書名：『マーケティングの「なぜだ！」
 ができる本：
 知らないと絶対失敗する!25の鉄則』

著者：佐々木宏

出版社・出版年：PHP 研究所，2003

マーケティングに関する資料を探していたときに本書を見つけた。マーケティングの「なぜだ！」ができる本、いかにもそれらしいタイトルである。そしてピンク色のカバー、あまりに怪しすぎる。図書館でこんな本を見たことがなかった私は手にとって読んでみることにした。

本書の構成は、商品は品質がよければ売れる、安ければ売れる、広告を打てば売れるなど、単純な考えで陥りやすい間違いを25個の失敗談などをもとにした例をあげて、それがなぜ間違っているのかをわかりやすく説明している。

本書は3つの問いで始まる。コンビニに並ぶ大手食品・飲料メーカー1社の新商品は1年間にいくつあるか。そのうち1年たっても棚に残っている商品はいくつあるか。さらにその中で3年後も残っている商品はいくつあるか。

自分なりに考えた後に答えを見ると、おそらく多くの方は驚くであろう。1社あたり新商品を年間約100アイテム出しているという。1年間にそんなにも商品が出ているにもかかわらず、それほど見た記憶はないであろう。1年後には約10アイテム、3年後には約3アイテムしか残っていない。これを多く感じるか少なく感じるかはおのおの違うであろう。しかしながら、ほとんどすべての商品が消え失せてしまっているという事実。それらの消えてしまった商品にはマーケティング計画がきちんとなされていなかったのかというと、そうではない。生き残った商品同様に綿密な計画のもと開発されたものである。つまり、「世の中のマーケティングのほとんどは失敗に終わっている」これが筆者のもっとも強調したいことである。

本書の中で非常に興味深い例があるのでそれを紹介しよう。それはある飲食店がメディアで取り上げられたのにもかかわらず、お客が減ったという項目である。

ある飲食店は駅から離れた立地で、客のほとんどが常連客であった。立地上一見客を得ることは難しく、店主はさらなる新規客を得るためにPRを友人に頼んだ。するとテレビ局の「駅から離れた穴場の店」という特集で紹介されることになった。そして、テレビで紹介されたことで多くのお客で店は溢れかえった。しかし、それもつかの間、1ヶ月もたつとお客は激減し、テレビで紹介される前よりも売り上げは減少したのである。

テレビで紹介されたのだから店が繁盛するのはわかるが、その後テレビで紹介される以前よりも売り上げが減ってしまったのはなぜなのかと思うであろう。これにはどのような因果関係があったのかを説明してみよう。

このような駅から離れていて一見客の獲得が難しい店は、常連客で持っているようなものである。それを一見客になり得るお客を取り込もうとする戦略にそもそもの間違いがあったのである。ビジネス界では80対20の法則というものがあり、それは利益の8割は2割のお客によってもたらされるというものである。この店では2割の常連客での売上げが全体の8割を占めていたのである。そして常連客というのは新規客を嫌うというのが一般的である。「この時間、この店に行けば、こういう常連と出会い、こういう話をしながら、こういう料理が楽しめる。」これが常連客の心理である。メディアで紹介されれば店はたちまち、また来てくれるかもわからない一見客でいっぱいになる。店の隅に追いやられた常連客は満面の笑みで新規客に愛想よく振る舞う店主に愛想を尽かす。常連客が離れる一方、店主は次々やってくる新規客に舞い上がる。売上げは右肩上がり。しかし、テレビを見てわざわざ何度も遠方からやってくるお客は少ない。気づいたときには後の祭、離れた常連客を取り戻すのは難しい。本書の中ではこのように一見有効であるように見える戦略も、むしろ自分で自分の首を絞める結果に終わってしまうという例がいくつも述べられている。その説明の仕方も誰もが少し考えればわかることから、さらに一步踏み込んだものへと順を追って述べられているため、本の中へと入り込んで著者と一緒に考えているように感じられ、納得しながら読み進められるようになっている。マーケティングの知識がない人でも、専門用語には注釈が同じページにあるため大変読みやすい一冊であると思われる。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 池田 哲郎

このハウツー本の書評のどこにみるべき点があるのだろうか？ 商売においては、「よい」から売れるわけではないのに、おごっていたのが日本の製造業であった。世界や消費者をみているようで、ただただ所属する組織を、であった。経営者も好き嫌いでものを考え、戦略がなく、部下を駒としてのみ扱い、海外の従業員や海外からの研修生に対しても似たような感覚で対処している。そういう態度だと、情報管理や機械整備も他人まかせでずさんになる。逆に、もうかると思ったらトコトン乱売合戦に走るものにサービス業がある。製造業にせよサービス業にせよ就職希望の学生諸君はたいへんである。そろそろ就職か、と思って、本棚をみると一冊の本があった。手にとったら、意外にはまってしまった。本当はオートポイエーシス論ぐらいから攻めてもらいたいところだが、学生らしい書評とみておきたい。

受賞者から一言



昨年の受賞作品を見る限りでは、堅い内容のものが選ばれると感じていたので、あえてそれらとは違ったもので書いてみて選ばれるだろうか？という気持ちで書いたので、自分の作品が選ばれたことに驚いています。ありがとうございました。



佳作

秋田 まどか



書名：『辞令』

著者：高杉良

出版社・出版年：新潮社，1997

「『辞令』を読んで」

近年、企業の不祥事が相次いでいる。「このような不祥事の一因は、無理な人事制度が引き起こしたものかもしれない。」そう思わせてくれたのが、本書である。

本書は、冒頭いきなり、左遷辞令のくだりから始まる。左遷されたのは、主人公である大手音響機器メーカー宣伝部副部長、広岡修平である。彼はある日突然、上司から左遷辞令を申し立てられる。しかし、彼は出世頭で、格下げされるような行動は何も思い当たらない。この不可解な左遷という謎を、正義感溢れる広岡自身が解明していく。

ここで興味をひくのは、第一章冒頭に左遷辞令のくだりを持ってきていることである。ただ、時間を追って、左遷前の生活から左遷までのくだりをだだら書くのではなく、はじめに「主人公を左遷させる」という文章構成が、読者に「なぜ広岡が左遷されたのか」という疑問を抱かせる。また、第八章まで、広岡の会社付き合いや女性関係などが明かされ、多くの左遷要因を読者は連想させられる。それがまた、読者を飽きさせないし、読者を没頭させる。では、なぜ広岡が左遷されたのか。それは、結末を言うに近いが、創業社長息子のポストを空けるための無理な人事が原因である。社長のワンマン経営やファミリー企業であるが故に、血のつながりに勝てない不条理な人事配置が企業内に築かれてしまっていた。そのため、一社員は自らの地位を保守するため、企業内部で悪質な情報を漏らしたり、ゴマすり競争に首を突っ込んだり、実績を上げた社員が昇進できないといった矛盾が生まれていた。

ここに見えるのは、企業の杜撰な人事体制と、その世界に溺れる人間味の無い社員の姿である。それ故、今日の企業の不祥事や政府機関の管理体制の甘さと重なる部分がうかがえる。企業内での、公正な人事こそが企業を成長させる一つの要因であり、その「企業が成長できるか」という一つの運命を、人事こそが握っているといえる。現に、主人公広岡は、企業内部の卑劣な実態を暴く中で、上司、部下、同期とのポスト争い、いわば肩書きを巡る複雑な人間関係により、怒り苦しみ、戦っていた。広岡は、企業で真っ直ぐに生きるサラリーマンの手本のような存在といえる。

企業の人事における倫理という視点で、一つ、雇用問題について触れておきたい。今年、二〇〇七年度入社の新卒採用状況は、少子化対策、団塊の世代の定年を理由に、ほとんどの企業が前年より採用を拡大し学生側が有利となった。多くの人間を採用するということは、働く側には大勢の同期との競争が待っているし、企業側には育てる労力が数倍必要と

なる。広岡自身も、大量採用時代でいち早く昇進していった身ではあったが、左遷という辞令を受け取った。多くの人材がいればいるほど、ポスト争いは激しく、そこには弱肉強食の世界がある。広岡のような不可解な左遷が起こらない評価システムが現在どれだけ整備され、機能しているかわからないが、社員一人を公正に、公平に計る評価制度は見直されるべき点かもしれない。また、最近定着しつつある企業の法令遵守への取り組みも、企業の存亡に関わる重要な問題である。人間の欲やプライドが、一瞬にして企業を破滅へと導く事件も数多く起きている。ここにメスをいれる機能的な監視システムや教育システムは企業にとって不可欠であるだろう。基本を忠実に振り返った誠意ある業務遂行が大切であることを、ようやく社会は意識し始めたのかもしれない。

最後に、この作品の著者、高杉氏について触れておきたい。高杉氏の作品は、実際に企業取材し、事実の裏打ちをとってから筆を執る。それ故、読者自身も、まるで小説の中にほうり込まれたように、働く人間にかかる重圧が伝わってくる。高杉氏の作品は、今回取り上げた『辞令』の他にも、住友銀行の磯田一郎元会長がモデルとなった『金融腐敗列島』やTKCの飯塚毅社長が実名で描かれる『不撓不屈』など数多くの話題作がある。いずれも、正義感に満ち溢れる作品が多く、経営学、経済学の要素を覗かせる。本書『辞令』も、登場人物の多さが難点だが、登場した人物を事業部制の組織図に当てはめたり、マーケティングの要素がにわかに顔を出したりなど、少しの工夫で読者自身も経営学、経済学を楽しむことができる。

企業の組織デザインは、日々改善されるべきであり、誤った組織デザインは多くの損害を生む。『辞令』は、人が公正に、公平に成長できる仕組みについて考えさせられる一冊であった

選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 小田 秀典

経済小説の書評として、よくまとまっている。小説の複雑な筋を限られた字数で要約するのは大変であるが、秋田さんは細部にこだわることなく小説の主題を端的に示している。さらに、このバブル期に書かれた小説の含意を現在の経済の視点から考えていることも好ましい。残念なのは、せっかく高杉氏の作品は「少しの工夫で読者自身も経営学、経済学を楽しめる」ことに気づいたのに、その実例が示されていないことである。簡単なもので良いので、この書評の中で具体例を示してほしかった。とはいえ、読書、大学での勉強、現実世界に対する思いを総合しようという秋田さんの思いが伝わる書評である。この方向での努力を続けてほしい。

受賞者から一言



この度は書評大賞・佳作に選んでいただき、とても光栄に思います。学生最後の年に受賞することができ、良い思い出となりました。ありがとうございました。



佳作

 丸尾 麻由美

まる お ま ゆ み

 書名：『走れ、俺たちのF1 :
 ホンダF1戦う15人』

著者：赤井邦彦

出版社・出版年：双葉社，2005

「『走れ、俺たちのF1 ホンダF1戦う15人』を読んで」

自動車やモータースポーツに興味のない人々にとってF1レースというと、マニアックな分野だと敬遠されがちである。確かにF1レースはモータースポーツと名はついているもののサッカーやテニスなど、自分で実際にプレーし楽しめる一般的なスポーツとは雰囲気も異なれば、楽しみ方も異なっている。

F1レースがマニアックであるといわれる所以としては、スポーツとして分かりづらく、あまり身近に感じられないという点が挙げられるであろう。近年、日本企業や日本人ドライバーが活躍している為、日本においても徐々に注目を浴びつつあるものの、欧米に比べればF1レースはまだまだメジャーではない。確かに、複雑なルールも多く、一般的なスポーツのように私たち観衆がルールを理解し、各自で反則などの判断をすることはなかなか難しい。さらに各チーム、マシン本体やエンジンはもちろん、その他の細かいパーツに至るまで最先端の技術を駆使している。また、戦略面においても、レースは綿密な計画のもと展開されている為、それらの情報一つの流出がレースの勝敗の行方を大きく左右するという性格上、ファンやマスコミなどに流される情報は極端に少ない。限られた情報の中でルールを理解し、レースを楽しむためにはF1レースやマシンなどについての豊富な知識が必要である。このような点においてF1レースはマニアックなスポーツなのである。

しかし、全ての物事が色んな一面を持っているように、マシン同士の競争としてのF1レース以外にもF1レースは様々な顔を持っており、それらが世界中のF1レースファンを楽しませているのも事実である。多くの人々が働き、新たな技術が生み出される現場としてのF1レースやスポンサー企業同士の戦いの場であるF1レース、最近では国際的な政治問題を抱えたF1レースなど、それらは知れば知るほど面白く、興味深いものである。

本書では、技術とともに人が成長する場としてのF1レースの姿と、ホンダの企業としてのユニークさの両方が描かれている。ホンダは、1964年初めてF1レースに参戦し、その後、2度の休止期間を経て2000年F1レースに完全復活した。そして、2006年8月F1世界選手権ハンガリーGP。悪天候に見舞われ、多くのマシンが次々とリタイアしていく中、Honda Racing F1 Teamのドライバー、ジェンソン・バトン氏がこのレースを制した。ホンダ単独チームでの優勝としては、実に39年ぶりの快挙であった。

創業者本田宗一郎氏やホンダの関連書を読んでいると「レースはホンダの原点だ」というよく言葉が出てくる。また「ホンダはユニークな企業である」と評されることも多い。

そして、これらの具体例を示す際、他の書籍では経営者としても、技術者としても著名な本田宗一郎氏の伝説とも言える有名なエピソードが紹介されている。しかし、これらの伝説はかなり脚色されていることも多いという。本書でも時折「ホンダのユニークさ」や「レースは原点」といった言葉がみられた。しかし、本書では、ホンダにおけるレースというものの位置づけやホンダのどのような点がユニークなのかを、実際にホンダで働き、F1事業に携わってきた15人のホンダマンの言葉から知ることができる。そういった点で、本書は現在のそれも等身大のホンダを反映しているといえよう。

本書を読み終えた今、ホンダが企業としてユニークであるとされるのは、ホンダスピリッツと呼ばれている「挑戦する」という姿勢を体現し続けているからではないだろうかと思う。新入社員にいきなりパーツの設計を任せてみたり、別部門の人間に重要な部分の開発を任せてみたりと、ホンダには、良く言えば大胆、悪く言えば無茶ともとれるエピソードが非常に豊富だが、そのどれもが「やってみよう」というチャレンジ精神のもとで行われているように感じた。

また、本書で取り上げられている15人の多くはエンジニアである。そのため、技術的な記述も見られる。しかし、そういった記述のほとんどが、仕事内容や自動車の仕組みの説明にとどまっている。むしろ15人それぞれがホンダという企業の中で何を考え、どう行動してきたのかを綴った短編のヒューマンストーリーの要素が強いため、それほど技術的なことに詳しくない私でも、抵抗なく読むことができた。それどころか、15人それぞれの入社経緯やさらには入社後の苦労話やそれらの克服話などがエピソードとして紹介されており、就職活動を目前に控えている私としては、非常に関心の高い内容であった。

マニアックとされるF1レースだが、そのレースの裏側に挑戦し続ける人々や企業があるということを通して伝えることができたのなら、もっと多くの人がF1レースに興味を持ってくれるかもしれない。私はF1レースファンの一人として、本書が、そのきっかけになればよいと思う。

選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 池田 哲郎

原著は一種の匠（たくみ）論である。書評者は自己のF1への関心をこちらにシフトさせている。誰一人が欠けても成り立たない、そういう匠たちの世界とのチームワーク。そこにおけるさまざまな人間模様には書評の焦点があてられている。しかし、だ。F1ファンであるなら、原著にはないが、先の村上隆にもみえるように、度重なるレギュレーションの変更という不可解なヨーロッパ基準になぜ目を向けないのか。ひとり立派にF1チームを作り上げた鈴木亜久里氏が実感を語っている：言うべきことは絶対に言わないといけないと。指標はコロコロと変わる。変わるのは公平を期すためである。匠はそれに真撃に対応する。でないと、事故につながる。なにはともあれ、この書評は職業観を考えるには最適である。

受賞者から一言



昨年に引き続き、今年も賞を頂けて、驚きと喜びで胸がいっぱいです。今回は私の大好きなF1レースの面白さをもっと皆に伝えたいと思い、選書しました。伝えたい思いはあるのに、それをどのように表現すればよいのかわからず、原稿作成中は苦労しましたが、本書と私の書評を読んで多くの方がF1レースに興味を持ってくれると嬉しいです。



佳作

横尾 圭介



書名：『図解よくわかる CSR：
企業の社会的責任』

著者：米山秀隆

出版社・出版年：日刊工業新聞社，2004

「よくわかる CSR」

最近嫌というほど横文字の単語を耳にします。新聞やニュースを見ていると、全く知らない単語や、聞いたことはあるけど詳しいことは知らない単語であふれています。

そんな中でも CSR(Corporate Social Responsibility)は企業が不祥事を起こしたとき、様々なマスメディアで使われ、誰もが一度くらいは聞いたことがあると思います。CSRとはどんなものかと聞かれても、私はまだ偉そうに説明できるほどよくわかっていません。ただ、この『図解よくわかる CSR：企業の社会的責任』は、そんな人にも「わかる」キッカケを与えてもらえるような本です。

CSRとは、企業と関わる様々な人々との信頼関係を構築し、事業活動を継続していく上で果たさなければならない責任のことです。企業はこれを果たすことによって社会の中で存続していくことができるというものです。つまりこの責任を果たしているか、果たしていないかで企業の価値が大きく変わります。たとえ儲かっている企業でも、従業員の扱いが悪いことで問題になった企業にいいイメージはもてないはずで。

この本を読むことで企業を見る観点「売上高」や「株価」などに加えて「CSRにどう取り組んでいるか」が加わるはずで。そしてこの観点は就職活動で役に立つと思います。

なぜCSRを学ぶことが就職活動に役立つかという点、CSRの利害関係者の仲には消費者や株主などの他に、従業員の存在があります。企業が従業員と良好な関係を築くために努力することが重要となります。よってCSR活動を重視する企業に入れば他の企業より良い職場環境が整っていると考えることができます。

もし就職した企業がCSRを軽視する企業だった場合、自分の生活に直接影響するかもしれません。最悪の場合、コスト削減目的でリストラされることがあります。その点、CSRを重視する企業は利害関係者である従業員をそうやすやすと切り捨てたりしないはずで。従業員の満足や信頼を高めることもCSRの活動内容であり、CSR活動が盛んな企業ほど働きやすい環境であるといえます。

そして何より私たちは消費者として多くの企業と関わりをもっています。企業のCSR活動に対する意識が強い消費者をグリーンコンシューマーと呼びます。グリーンコンシューマーは環境汚染や雇用面で人権抑圧などを行った企業に対してボイコット(不買)運動という行動を起こします。日本ではあまりボイコット運動が見られない代わりに、日本の消費者の品質に対する厳しさは世界一であり、消費者の信頼を得なければ製品を買ってもらえない状況が、日本企業の世界市場での競争力の源泉の一つとなっています。

そのほか日本の CSR 活動は「環境問題」への取り組みが大きいのが特徴です。環境面での取り組みが評価されて日本の CSR 活動は世界 2 位に位置づけられています。身近なもので「エコマーク」や「再生紙使用マーク」があり、様々な商品に使用されています。他にも自動車の CO2 の排出量が規制されたり、消費電力が少ない家電製品など、私たちの周りには環境に配慮した製品で溢れています。

本書にはこういった「環境ラベル」というものを細かく分類したり、数多くある国際規格を表にして簡潔に解説してあります。

ここまで見てみると、CSR はただコストがかかるだけの余分なものに見えた人もいると思います。たしかに、やればやるほど企業の経営状態が良くなるようなものではありませんが、ただ高品質な製品を作るだけでは日本の消費者の心は動きにくくなっていて、付加価値の一つとして「環境にやさしい」製品が販売されています。

最近では『NEWSWEEK』など CSR 活動を積極的に行っている企業をランキング付けしている雑誌もあります。ここで自社の活動が評価されると、消費者の評価や株主など投資家の信頼も高まります。このように企業の地道な努力によって様々な人から信頼を得て、企業を成長させていくのです。その反面、一度信頼を失うと今まで積み上げてきた信頼が一瞬にして無くなります。実行することはとても難しいことですが、とても大切なことです。本書を読むと、CSR 活動の大切さを実感します。本書を読むことで消費者としての知識を深めたり、就職活動の準備のためにも、是非とも読んでほしいと思いました。

選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 竹内 富士雄

今回のコンテストには実用書の批評がかなり多かった。実用書の批評はどうあるべきか。専門書の場合、批評するのも専門家であるから、批評対象書籍の著者の観点がどう新しいか、記述にどう工夫がなされていて類書と異なるかを論、間違いがあればそれを指摘し、その方面での今までの「ベストセラー」に比べ新しい著作の存在意義がどこにあるかを指摘するというのが普通のスタイルと思われるが、学生対象の批評コンテストに類書との比較を要求するのは無理がある。そこで結局批評者が原著の著者の意図を如何に正確に読みとっているか、またそれを如何に巧みに紹介しているかで評価することにした。その観点で今回の批評作品を見ると『コーポレート・レピュテーション』と本作品の 2 編が良く書けていた。本作品の原著を見てみると私は全く専門外でよくは分からないがなかなかの労作であることは分かる。図解のやり方も巧みだし統計も豊富でかなり新しい。だから本書に関する限り現著者の意図を理解することはそれほど難しい事ではないと思われる。それを考慮した上でも本作品は導入も巧みで説明する文章も平易、なかなか良く書けている。最終段落もなかなか良い。

受賞者から一言



今回の書評大賞に応募したときは、自分が入賞することなど微塵と考えていなかったもので、入賞の知らせを聞いたときは本当に驚きました。

元来文章を書くことが大の苦手な、執筆途中で悩んだとき川又先生にアドバイスして頂いたおかげで受賞できました。今回の受賞は何より自分の自信につながったことが一番の収穫であったと思います。



佳作

小倉 匡弘



書名：『ブランド構築と広告戦略』

著者：青木幸弘，岸志津江，田中洋

出版社・出版年：日経広告研究所，2000

炭酸飲料で有名なブランドといえば、と聞かれてパッと頭に思い浮かぶブランドは何だろうか。その思い浮かぶブランドは個人によって様々である。しかし、企業は消費者や顧客が思い浮かべるブランドが自社製品になるために並々ならぬ努力を長年行っている。なぜなら、自社と競合他社との製品・サービスの本質的機能に差がない場合、自社製品ブランドに対して消費者が付加価値を感じ、好意的なイメージを形成していれば、自社はその市場で競争上の優位性を得たことになり一層有利に事業活動を行えるからである。

そこで、ブランドとは何か。本書によれば、元来、ブランド「brand」という言葉は古代スカンジナビア語の「brandr」(「焼き付ける」の意)に由来し、また、英語においても「burned」(同じく「焼き付ける」の意)から派生した名詞であると言われている。その元々の意味は、自分が所有する牛などの家畜を他人のそれと区別するために用いられ、後に、それが陶工などの職人が自分の作品を他者のそれと区別するために用いた印などを指す言葉になったと言われている。今日的な意味では、「ある売り手の財やサービスを他の売り手のそれとは異なるものとして識別するための名前、用語、デザイン、シンボル、および、その他の特徴」(AMA、米国マーケティング協会)であると規定している。また、ブランドの機能として、当該ブランドを他のブランドとの識別や品質保証のための信頼の印であるとしている。

近年、ブランドに企業の関心が高まっている。その時代背景にはバブル崩壊後の価格破壊といった状況で、多くの企業が自社ブランドの価値の見直しを迫られたことが挙げられる。消費に関する知識と技術を身に付けた新たな消費者の前に、もはや企業ブランドの傘に頼った従来型の戦略では十分ではなく、個々のブランドが明確な主張をもつことが不可欠な時代となってきたからである。さらに進んだ立場として、ブランドは、ヒト・モノ・カネ・情報に次ぐ新たな経営資源になりつつあり、それが企業と顧客、あるいは、組織構成員などのステークホルダーとを結合させる力をもつ。

そうしたブランドを構築するために、主に広告というコミュニケーションを駆使して、いかに自社製品に対しての意味づけやイメージ形成を対象市場にいる消費者に伝え、消費者と安定した長期的な信頼関係を結ぶのか。また、それらの企業努力の結果として獲得した顧客との関係性を維持・強化していくか。本書は「ブランド・コミュニケーション」を基盤として、全十七章から成る、理論編・手法編・事例編という三部から細かく分析・整理され、構成されている。

第一章から第六章までの第一部(理論編)では、これまでのブランド研究の歴史や基本

問題、広告コミュニケーションとの関係や戦略課題、さらには広告効果測定やブランド価値測定といったテーマが取り上げられている。第七章から第十一章までの第二部(手法編)では、コミュニケーション効果の把握やコンセプト開発、ブランドのシンボルや体系の管理、データベースの構築といった実践的な課題に対応する形で論じられている。第十二章から第十七章までの第三部(事例編)では、ロングセラー、キャラクター、Eブランディング、グローバルブランドなど、さらに実践に踏み込んだ事例を紹介している。

私が特に興味をもった事例編は、国内に留まらず、一度は聞いたことがあるようなブランドが、どのような活動や考えの基で広告などのコミュニケーションを通して、一つ一つの製品がブランドとして成りえたのかを論じており、どの企業をみても同じ戦略はなく、それぞれの企業が自社製品の良さをどのようにして、消費者に伝えていたのかということ等を学べ、まるで企業一つ一つのブランド作りの物語を読んでいるようであり、驚きと興味深いものがあった。

前述のとおり、市場は絶えず変わり続けるもので、その時々に合わせて企業戦略を必要とするのだが、現段階においての最新の研究を論じている。本書には多くの図表が用いられており、文章だけでは理解しにくい理論の整理や事例のイメージをよりスムーズに把握できる。詳しい説明が必要な語句には、章の終わりに要約があるために、章ごとの理解がしやすく、執筆者の工夫も見られた。さらに、本書は、日本において第一線で活躍する実務者と研究者の方々々が執筆しており、理論だけでなく事例紹介だけでもない、とても読み応えのあるものであった。少し残念なのは、執筆者の方々々が各章を分担して執筆しているためか、文章中に重複した言い回しが何度かあったことだ。本書はボリュームがあり、手にとるのが億劫になるかもしれないが、少しでもブランドや広告などに興味のある方には経営学部生であるかどうかに関係なく読めるのではないだろうかと思う。

選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 小田 秀典

小倉君の書評は、前半の4段落で図書の扱う問題(ブランド)について概説するとともに図書の構成と内容をまとめて、後半の3段落で感想と評価を述べている。「一つ一つのブランド作りの物語を読んでいるよう」という事例編の感想や各章ごとの重複の指摘から、小倉君が各論文をしっかりと読んでいることが窺われる。残念なのは、これらについての例示がないことである。字数の制約が厳しかったのであろうが、一例を具体的に論じると良かったと思う。これだけ大部の論文集を読んだのだから、ぜひこの成果を日頃の勉強や卒業研究などに活かしてほしい。

受賞者から一言



この度、京都産業大学図書館書評大賞の佳作に選んでいただき、ありがとうございます。驚きと嬉しさでいっぱいです。この賞は所属ゼミを担当していただいている川又先生のお力添えの賜物であり、ゼミで学んだことを発揮できた結果だと思っています。今度は、さらに上を目指し文章力や思考力に磨きをかけ応募したいと考えています。



書名：『iモード事件』

著者：松永真理

出版社・出版年：角川書店，2000

「『iモード事件』を読んで」

今や、iモードと聞いて、そんな言葉聞いたこと無い、知らないという人はいないのであるが、と思うほど、iモードは人々に浸透している言葉の一つである。

iモードとは、NTTドコモグループが同社の携帯電話網を使って提供しているインターネット接続サービスのことである。利用者も日本で一番多いといっても良いほど、規模は大きい。現代社会のなかで、iモードなしには回らないといっても過言ではないほど、人々にとって欠かすことのできないものである。

では、誰がiモードを開発したのか、どうやって生み出されたものなのか、と聞けば、たぶん大多数の人が首をかしげ、口ごもるのではないかと。これほどまでに有名なiモード、こういった表舞台に出るまでの過程をぜひ知ってもらいたいと思う。

そこで、『iモード事件』という本を紹介する。

この話は、iモード 生みの親 松永真理氏が、NTTドコモ会社と結婚（入社）し、iモードという事業を身ごもり（開発する側に回り）様ざまな栄養（困難、他人の人からの支え）をもらい、苦勞してやっと世にでてきた、という構成である。

そういった一連の流れも読み取ることができるがもう一つ、こういった人間と一緒に仕事すれば良いのか、という人事採用から、ターゲット選定、内容を決めるなど、モノを作る側に立った企業の視点からiモードを観察することができる。

これには、今から就職活動を始める私たちにとって、こういった人間が求められるのかという問題に、とても大切で、重要なヒントとなる。

iモード開発組織において、以下二つのことを肝に銘じながら人を探した。それは、ひとつは「本当に新しいことに挑戦したい人間」。新しい場所に行きたいと思う人間には二種類に分けられるという。現在の場所から逃避したいがために新しい場所を望む人と、新しいことに挑戦したい人だ。成功の条件は、もちろん後者の人材を見極め採用することである。

もうひとつは、「ストレス耐性の強い人間」である。iモードみたいな新規事業をやる時には、五里霧中で何が起るかわからない。何もかもが新しいので、決まりはなく、自分ですべてを作っていかなければならない。人や企業間との絆、信用など。負担がかかった場合に、ぽきりと折れてしまっただけでは困るから、臨機応変に物事に対応していく能力がある人間が必要だという。

なるほどこの本を読み進めていくと、そのような人材を求める理由が見えてきたような気がした。iモード事業を進めていくにあたり、他の事業と提携する企業を捜し求める場面があった。その過程でさまざまなプレッシャーが発生し、それに打ち勝つ事業組織の人々が描かれている。悩んでいる仲間を励ましあう姿、一つの問題を全員で解決させようとする姿勢など、組織で動くことの大切さなど、協調性が重視されている理由が分かるような気がした。

この本では、松永氏や、他の組織の人間がさまざまな困難にぶち当たる。それをどう乗り切っているかが書かれている。

たとえば、第一回 i モード記者会見では、記者がたったの数人しか現れなかった。もっとたくさんの記者であふれると思っていた松永氏は、i モードを根本的にもう一度見直した。広報活動、値段、i モードの内容……。松永氏は、i モードは絶対的に良いものであり、それを広く人々に知って欲しいという信念があったから、この仕事に熱意をかけて挑んだ。困難や挫折を味わおうが、自分はその商品が良いものと信じている、この先絶対に役に立つものだという自信が、困難を乗り越えた。第二回目の記者会見では、予想以上の注目が集まり、会場は人でいっぱいだった。

多少の困難でも、自分は正しい、自信があると信じていれば、その熱意は必ず伝わる。そのように思って行動すれば、必ず前進する。挫折を味わってこそ強くなるし、もう一度真剣に見直しができる機械なのではないかと思った。まさしく、挫折はチャンスなのである。何も恐れる必要はない。挫折を経験してこそ人は強くなれるのだ。とこの本から読み取ることができた。

就職活動前の私たちの立場からこの本を読んでいくと、どのような人材が求められているのか（この場合は新事業を運営していくのに適した人材に重点を置いているのかも分からないが、基本は共通したものだと思う）勉強になる。その他の人にも、i モードは単に試行錯誤してできたものではなく、あらゆる人が携わり、歓喜、慈愛、憤りなど、さまざまな感情を乗り越えてやっと生み出されてきたものであるのだということが分かる。形のないものから完成、世間に知れ渡る経緯を知ることができる、貴重な本であると思っ

選考委員による講評

選考委員代表 理学部教員 竹内 富士雄

この書評作品を読んで原著者の松永氏というのはどうも嫌みな女だと思った。自分の発明になる i モードの出来を、いくら「現代社会がそれなしには回らない」と思っているにしても「事件」と呼び、また、自分が NTT ドコモ社に引き抜かれた事情を「本当に新しいことに挑戦したい人間」「ストレス耐性の強い人間」として呼ばれたと私が理解したからで、図書館から原著を送ってもらってもはじめ手に取る気がしなかった。止むを得ず読み始めてみるとこれがなかなか面白い。これには松永さんというリクルート社で雑誌の創刊などに携わっていた一人の中年女性が、本人の言い方によれば HTML も知らないのにたまたま知人の紹介で通信を扱う NTT ドコモ社に入り i モードの開発という彼女に取って一世代の大「事件」に巻き込まれて奮闘するさまが描かれている。i モード事業の成功は原著によれば企画力にも技術力にも優れた榎と言う男の実力によるところが大きいのが、彼女はその脇でビジネス一辺倒の NTT 社の中で、何時でもゆっくりしたソファに腰掛けてビールでもワインでも飲める「クラブ真理」を作ってグループの中に談論風発の雰囲気を作るなどしてそれを支える。IT というのはデファクト・スタンダードの世界であるから i モードが本当に一番優れていたのかどうかはわからないが、遮二無二努力して経営的に成功を収める物語は、決まりきったパターンとはいえ読む人を楽ませる。この書評の著者はこの物語から「多少の困難でも、自分は正しい、自信があると信じていれば（この日本語はおかしい）その熱意は必ず伝わる。そのように思って行動すれば、必ず前進する。挫折を味わってこそ強くなるし、もう一度真剣に見直しができる機械（機会）なのではないか」という処世訓を引き出す。もちろん人は何からだって学ぶことができるからこの書評を書いた人がそう読んだって文句をいう筋合いはない。でも原著の面白さの伝え方としてはもうちょっと違った観点があってもよかったのではないかと思われる。

受賞者から一言



この度は、私の作品を選んでいただき、本当にありがとうございました。大変嬉しく誇りに思います。書評大賞に応募しようとする中で本を読む人が増えたり、書評大賞の作品を読むことで、本に興味を持ったりする人が増えればいいなと思います。



書名：『科学の最前線で研究者は何を
見ているのか』

著者：瀬名秀明

出版社・出版年：日本経済新聞社，2004

「人が科学で拓く道」

突然だが、英語の早期教育は必要なのか。

本書でこれは否定されている。私もそうは思わない。

英語に限らず、語学の早期教育というものは早期の言語能力の獲得ではない。言語教育とは言語の運用能力の向上を旨とするものであって、そもそも母語においてですら文章理解力や論理的思考力が十二分に養われていない段階での第二言語教育など、愚行としか言いようが無い。二兎を追う者が易々と両方ともを得ることなど、そうそう無いものである。第二言語においては、母語言語能力の獲得がしっかりとなされ、母語における理解力・思考力を基盤とした上での教育（あるいは学習）及び本人の努力が必要不可欠なのだ。

数学者である藤原正彦さんも自身の著書『国家の品格』で「内容がないのに英語だけは上手いという人間は、日本のイメージを傷つけ、深い内容を持ちながら英語は話せないという大勢の日本人を、無邪気ながら冒瀆しているのです。『内容ナシ英語ペラペラ』は海外では黙っていて欲しいくらいです」としており、英語の早期教育は国際社会たる現代においてゆゆしき問題であるように感じられる。

さて、音楽やスポーツは一種の「技術」であると捉えられよう。「技術」が概して一意的であるのに対し、「言語」はひとつの事柄を表すうえで多種多様であり、その鮮やかさは国に、ひいては個人によるものが大きい。そしてこれは科学においても同様のことが言えるのだ。

本書は薬学博士・また作家でもある著者、瀬名秀明さんと、さまざまな分野で活躍する日本人科学者との対談をまとめたものである。構成は大きく分けて4つ。「人」「心」「ミクロの世界」「時間と空間」である。冒頭で触れた英語教育についても、「心」のテーマ「赤ちゃんはどうして言葉を覚えるのか」（酒井邦嘉）で話題にのぼる。

「科学というと国や文化を超えたインターナショナルなものであると考える人は多い。（中略）本来の研究とはインターナショナルであると同時に極めて個人的なものであり、環境に密着したものである」（本書より）。科学者にとって研究機材が先述の「技術」ならば研究者各自の発想が「言語」といったところだろうか。瀬名さんとの対談で科学者たちは、研究を始める契機や研究分野の解説に始まり、現在の研究内容、この先の展望などについて、事細かに各々の「言語」を用いて語ってくれている。対話形式でまとめられているためか、あたかも自身が対談に参加し、二人の声に耳を傾けているかのように読むことができる。そこには一般に持たれている「科学者」のイメージはなく、本書を読めばこれまでの認識も変化するのではなかろうか。なかには「科学者ってやつはピーカーや顕

微鏡を見つめては笑みを浮かべて、機械的に研究を続けて、実験結果に満足しては自身の仕事に陶醉するような人種だ」 そんな科学者像を抱いている者もいるかもしれない。だが彼らは存外に人間的なのである。

様々な研究対象を題材に繰り広げられる対談ではあるが、「根底にはどれも『人類とは何か』『どのようにして生まれ、どこへ行くのか』という私たちの素朴な疑問がある」(本書より)。今、多くの人が無気なく手にしている携帯電話をはじめとして、私たちは数十年前までとは比べ物にならない程の科学技術に囲まれて生きている。こうした科学技術は一对多数の繋がりを強固なものにし、人類という種のお互いの距離を極めて小さなものにしてきた。人類は孤独であるがために、自身の種族間の繋がりだけでも科学によって確かなものにしようとしている。そのように私には感ぜられた。孤独でない事を確かめようとする顕著な例が宇宙研究だ。しゃにむに他の惑星での生命存在の証拠を捜し求めていたこともあったではないか。人類にとって科学は「周囲」と自身とを繋ぐ路であり、科学者一人ひとりがそれを闇の中手探りでこつこつと拓いている。そんな光景が、本書を読む中で私の前に現れては消えた。

ゲノム解析、生物の寿命、ミトコンドリア・イヴ、宏観異常現象からの地震予知、ウイルスとパンデミック、量子テレポーテーション、究極の真理……。一見すると一個人からは遠く離れた話のようではあるが、研究の先にあるものを追い求めているのは、一人ひとりの研究者たちであることを忘れてはならない。国を超えた研究の場を広げる分野も数多く存在するが、結局はパーソナルな熱意によって科学は支えられているのだ。日々生活を豊かにしようという科学技術が生まれる現代で、私たちはもっと積極的に科学に歩み寄るべきなのかもしれない。

本書でも紹介されているが、2003年に生まれた子供(特に女の子)は、その大半が今世紀を乗り切れる可能性があるそうだ。この先科学はどのような道を行くのか。どこへ向かうのか。そして、その先で何を得るのだろうか。一世紀の後、その一端を目撃できるかもしれない彼女らを、私は少し羨ましく思う。

選考委員による講評

選考委員代表 経済学部教員 小田 秀典

私は、他の先生がたも同じだと思うが、学生諸君には各々の専門知識を深めると同時に、広く関心をもって専門外のことも理解しようとする好奇心と、それを可能にする能力を身につけてほしいと思う。様々な分野の科学者たちが何をどう考えているかに興味をもつことは、学生にとっても科学にとっても望ましい。瀬島君は、この様々な分野の科学者の対談集を書評にまとめることで、単に興味を広げただけでなく、自分の科学観を自覚できたと思う。もちろん、それが唯一絶対ではないことは、瀬島君自身が良く理解しているであろう。教育や研究について安易な結論に流れないためにも、大学での勉強を通して科学の理解を深めてほしい。

受賞者から一言



去年友人が応募し良い経験になったと言っていたので、この度は応募しました。書評というものに初めて挑戦したのですが、稚拙な文章であったにもかかわらず、このような賞を頂き大変嬉しく思います。

今後もこのような機会があれば、また書評というものに向き合ってみたいです。

第2回書評大賞アンケートから



今年度は、書評の応募と同時にアンケートに回答いただきました。ご意見・ご協力ありがとうございました。みなさんのご意見は次年度の書評大賞実施の参考にさせていただきます。



応募者の声をどうぞ。

Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

「ゼミの先生の推薦」「去年も応募したから」「自分の文章力を高めるために応募しました」「みんなにこの本を読んでもらいたかったからです」「本を読む機会を増やしたかったから」「昨年度に応募時にものを書くことが楽しいと気づいたから」「読書がすきなので、その感想を文章にし、評価して頂きたく思ったからです」「友人の応募に触発された」「自分の気持ちを一度ははっきりと文字に表したかったから」「お金がほしかったからです。そして挑戦する場を求めていたからです」など。

Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

先生からの推薦・指示 (17人)

図書館で見つけたから (25人)

興味のある分野だから (59人)

話題の本だから (13人)

好きな作家だから (18人)

その他

(その他の内訳)「すきな本だから」「たまたまその時読んでいたから」「授業で取り上げられ、興味をもったから」「尊敬する偉大な人物だから」「以前読んだ本で蔵書があったから」など。

Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」(理由)

「書評を書くことで力がつくので、また応募しようとおもいます」「本を読むことの楽しさを知ったため」「ただ本を漠然とよむのではなく、熟考しながら本を読む良い機会だと思うから」「本を批評することによって自分がその内容をどのように理解しているかよく分かるから」「自分が読んだ本の感動を誰かに伝えたいから」「今回やってみて、意外と楽しかったので」「第三者の評価を得られる状況で文章を書ける機会だから」「違うジャンルの本にも挑戦したい」「本を読んだ経験を活かすチャンスだから」など。

「いいえ。」(理由)

「学校の勉強や私事で忙しくなると思う為」「大変だったから」「もう少し文章力を磨いてからにしようと思うから」「本年度で卒業するため」など。

Q4) 執筆してみたの感想や、提出時期、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。

感想

「本を読むときの姿勢が変わりました。ただ読んでいただけだった文章が、さらに奥にある意味を探そうという気持ちになりました」「一回読んだものを自分の頭で整理して文章であらわすということは大変だったが、一度読むだけより理解することが出来た」「去年も参加したが、毎年続けることで自分の変化に気づけた」「去年より少し上手に書けた気がする。成長できていたら嬉しい」など。

対象図書について

「最新作などの書評も書いてみたいと思ったけど、図書館になかったので残念だった」など。

提出方法について

「メールで提出できる点が便利でとても良い」「前回の提出方法と比べ、フォーマットがきめられていてわかりやすい」「(応募フォームの中の)「運用」「所在」などがよく分からない」「手書きの原稿も受け付けてほしいと思いました」など。

提出時期について

「学期はじめて忙しいので、提出時期をあと1週間ほど遅くしたほうが作品は集まるのではないかと思う」「期限なのですが、24時まで受け付けているのは非常にありがたいことです」など。

文字数について

「もう少し字数に幅をもたせても良いのではないかと思いました」「2000字は少なく感じた」「文字数が多すぎる。1,000文字くらいが良かった」など。

Q5) 6月に「書評大賞講演会」が開催されました。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。

「文章を読み解き、そこから如何にして自分の意見を述べるかという手法や考え方について非常に興味があるので、そのような内容の講演会をこれからも開催して欲しいと思う」「本学客員教授の宮崎哲弥氏か、宮崎氏のライバルといわれる福田和也氏を講師としてお招きいただけるとうれしいです」「保坂和志氏：小説に対しての姿勢がひたむきだし、ものを書くことに尋常ならぬ執着心を感じるから、もし保坂さんの講演会があったら、みんなの本や文章を書くことに対する士気もあがるだろうし、もちろん僕もあがる」「希望する講師：森 博嗣氏(科学者)」「村山由佳氏、石田衣良氏など」「リリー・フランキーさんの話が聞きたいです」など。

書評を書く機会を増やす 毎日新聞社「ホンヨモ!クラブ」

4年次生の中に「これが書評を書いて応募する最後のチャンス」と思って応募してくださった方がありました。書評を書いて応募する機会はこれからもあります。たとえば、毎日新聞社の「ホンヨモ!クラブ」では、読者の書評を募っています。第1回の入賞作は2006年9月17日(日)の毎日新聞に掲載されました。第2回の入賞作は2006年12月17日(日)の紙上に掲載予定です。書評対象書籍は、第1回、第2回とも「毎日新聞記者おすすめの本」4冊です。読者自身のオリジナルな書評(600字以内)が募集されています。第1回は、116点の応募作があり、優秀作8点(各書籍2点以内)が紙面に掲載されました。問い合わせ先は、毎日新聞「ホンヨモ!クラブ」事務局。

<http://www.mainichi-msn.co.jp/shakai/gakugei/etc/honyomo>

Lesson 引用のかた

「2年目を迎えた書評大賞ですが、残念な問題も浮かび上がってきました。すでに公表されている書評や解説を、剽窃・盗用した作品が、複数、見つかったことです。他人の意見を引く場合、引用部分と自分の意見とを、はっきり区別して示さなければなりません。」と全体講評で、小林一彦図書館長は言われています。そこで、引用のかたを編集部でまとめてみました。

引用のかた

自分の意見を展開するために、文章中に引用文を挿入することがある。

引用する方法として、引用文をカギカッコ「」でくくる方法と、段落を変えてカギカッコでくくらず、1字以上下げて書く方法がある。次のような決まりもある。

- ・ 引用文中のカギカッコは二重カギに変える。
(例)「『引用』とは、人の言葉や文章を、自分の話や文の中に引いて用いること」
- ・ 原文の改行は、改行位置にスラッシュ(/)を挿入する。特に詩歌の引用で使う。
(例)「山のかなたへ / 続く道」
- ・ 原文に誤字、誤植があった場合でも、そのまま引用し、(ママ)という符号をつける。
(例)「誤字・誤触(ママ)に」
- ・ 引用文が長いときは[……]を用いて、前略や中略を行う。(中略)と書くこともある。
- ・ 引用文の一部を強調するときは、下線や傍点をふってもよく、「(下線は筆者)」や「(傍点引用者)」などの言葉を引用の最後につけ加える。
(例)「大切なことはこころで見なければ(下線強調は筆者)」
- ・ 引用文の指示詞が何を指すかわからないときは、「それ(=書評)は」と原文の前後に出ている言葉で置き換え、「(括弧内筆者)」を引用の最後につけ加える。「このころ [1970年代] には」というように、[]でくくる。
- ・ 原文が外国語で書かれ、日本語に訳して引用するときは、(原文英語、訳は筆者)のように書く。



<参考文献>

- (1)河野哲也著『レポート・論文の書き方入門』第3版 慶應義塾大学出版会, 2002年
(816.5||KOU 指定図書)
- (2)木下是雄著『レポートの組み立て方』筑摩書房, 1990年 (816.5||KIN 指定図書)
- (3)斉藤孝, 西岡達裕著『学術論文の技法』新訂版 日本エディタースクール出版部, 2005年
(816.5||SAI 2階)
- (4)戸田山和久著『論文の教室: レポートから卒論まで』日本放送出版協会, 2002年
(816.5||TOD 指定図書)
- (5)浜田麻里, 平尾得子, 由井紀久子著『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版, 1997年 (816.5||HAM 指定図書)

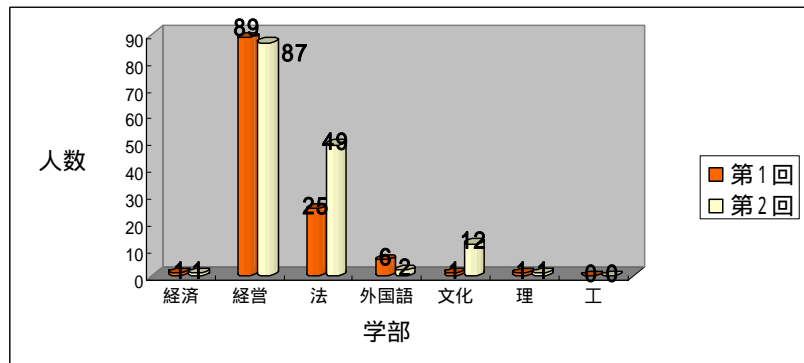
第2回京都産業大学図書館書評大賞 統計

1. 学部別応募者数

昨年（第1回）と同じく経営学部の学生が最も多く、続いて法学部、文化学部となっています。応募時のアンケートによると、これらの学部ではゼミの先生から応募することを勧められているとのことです。

これら応募者数の多さが、入賞者数にそのまま反映される結果となりました。

今回応募者数の少なかった、経済、外国語、理、工学部の学生の皆さんは、ぜひ次回書評大賞に応募してください。

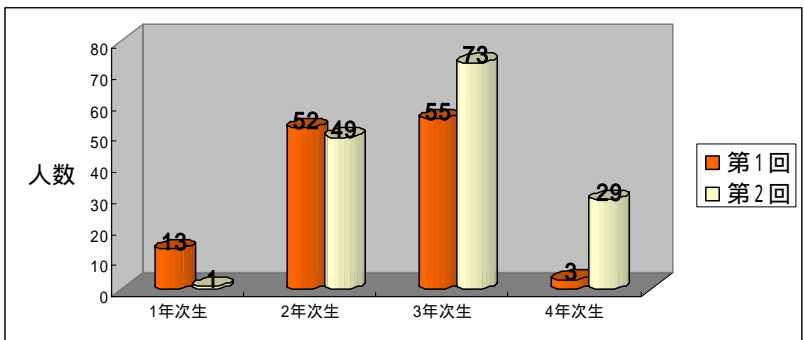


2. 学年別応募者数

2、3年次生が多く、やはりゼミの先生の推薦などにより、「書いてみよう」という意欲が掻き立てられていることが窺えます。また、4年次生の応募が圧倒的に増えたことは、じっくり読み、そして書くことに集中できる余裕が出てきたという表れでしょうか。

一方、1年次生の応募が大幅に減ってしまったことは、大変残念なことでした。学生生活の中では、レポートや論文などを書く機会がどんどん増えてきます。まだ時間的余裕があるこの時期に、書くことの訓練として「書評大賞」にチャレンジしてほしいと思います。

なお、2年次生1名、3年次生17名、4年次生22名の計40名は2回連続で応募されました。

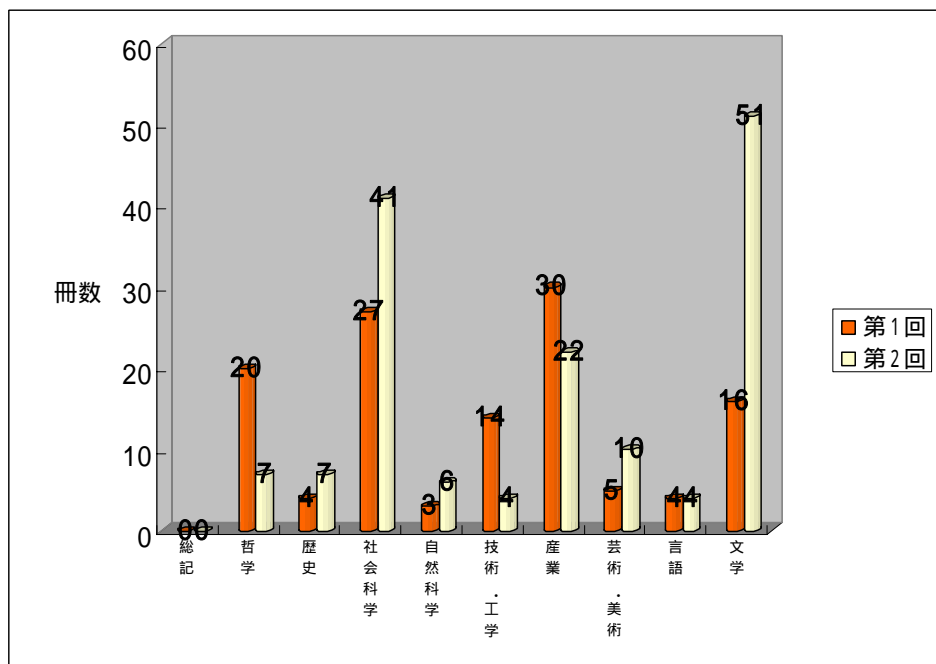


3. 対象図書の分野別冊数

経営学部の学生からの応募が多かったことで、昨年と同様に社会科学（特に企業・経営など）、産業（特に広告・マーケティングなど）といった分野の専門書や実用書が多くなっています。

しかし今回一番多かった分野は文学でした。応募対象として最も多かった『東京タワー』など、話題となっている小説や好きな作家の作品を選んだという声がアンケートでも多くありました。

なお、哲学・宗教などの分野は減ってしまいましたが、「難しそう」「わかりにくい」などの固定観念は捨てて、



一度手に取って読んでみてください。あなたの将来のヒントがそこにあるかもしれません。

京都産業大学図書館書評大賞 概要

応募要領（抜粋）

1. 目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

2. 応募資格 京都産業大学の学生。ただし大学院学生を除く。

3. 応募要件

- (1) 本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
- (2) 文字数：1 篇につき 1,600 字～2,000 字以内。ワープロ原稿に限る。マイクロソフト社の Word を使用すること。
- (3) 応募作品は本人のオリジナルであること。
- (4) その他：1 人複数篇の応募可。ただし受賞は 1 人 1 篇。応募作品の使用権は京都産業大学に帰属する。

応募総数

152 名 153 篇

実施日程

応募期間 平成 18 年 6 月 1 日（木）～9 月 29 日（金）24 時

選考期間 平成 18 年 9 月 30 日（土）～11 月 8 日（水）

入賞発表 平成 18 年 11 月 29 日（水）

表彰式 平成 18 年 12 月 13 日（水）

選考委員より 一言

審査に当り、普段なら読むことの無いような書籍を読まなければならないことは大変でしたが、得難い経験でした。**少し世界が広がった**ような気がします。（竹内先生）

出たばかりの本を対象にしたらどうでしょうか。もっと自由に書けるような気がします。また、ドラマや映画などで話題になるような原作は書きやすいのですが、それなら書評において類書との比較もおこなったらどうでしょうか。**新鮮な地平**がみえてくるかもしれません。（池田先生）

皆さんの書評を読ませていただき、「**読んでみたいなあ**」と思う本がいくつもありました。今度の年末年始は読書三昧になりそうです。今回応募された方もされなかった方も、次回も誰かに読書欲を湧かせるような作品を期待しています。（天笠）

教員が学生諸君の書評を読むことは、教員にとって学生諸君がどのような本をどのように読んでいるかを知る機会となった。それらに対する批評を学生諸君が読むことで、学生諸君に対する**教員の期待**が伝わればよいと思う。

（小田先生）

ここのところ忙しくて仕事関係以外の本を読む時間がなかったのですが、皆さんの多彩な書評を拝読させて頂き、改めて**読書の面白さ**を再確認することができました。（高嵩先生）

書評には、**その本の要約や注目すべき点、魅力**などが書かれていて、選書にも役立ちます。（近江）

実際には応募しなかった人を想像すると昨年より多くの方が関心を持ってくれたと思います。来年応募を考えている人は、**来年表彰を受けている自分を想像**し、書評執筆の強い動機としてください。さらなる力作を期待しています。（真部）

突然ですが、書評大賞はお米づくりと同じようなサイクルで実施しています。丹精込めて育てられた、とれたての**京都産大ブランド**品をどうぞご賞味ください。食わず嫌いの皆さんも、ぜひ来年は応募して下さるよう期待しています。（中上）